恒川遺跡群

（田中・倉垣外地籍）

2003年３月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群

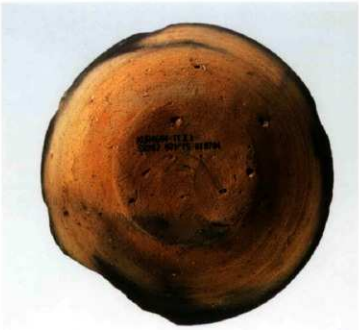
（田中・倉垣外地籍）

2003年３月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群を上空より望む

巻頭図版 2



S B 307

S B 307

S K 91

S K 89

S T 62

参考

参考

参考

序

今日、飯田市を代表する遺跡の一つとなっている恒川遺跡群の大規模な発掘調査は、昭和52から57年度にかけて一般国道153号座光寺バイパス建設に先立って行われました。この調査では、皇朝十二銭の一つである和同開珎銀銭や硯・帯金具といった特殊なものがみつかり、ここが古代「伊那郡衙」跡ではないかとの推測がなされました。これを受けて、郡衙の実態解明のための重要遺跡範囲確認調査を昭和57年度以降、国・県の補助事業として実施するとともに、バイパス開通以後、沿線の開発が進むなかで、地権者や地元の皆様の多大なるご協力を得て、随時発掘調査を実施してまいりました。長年にわたる調査の成果により、郡衙の様相も明らかになってきています。

また、近年「和同開珎」以前に鋳造された貨幣である「富本銭」の発見が奈良県飛鳥の地でありましたが、県内でも隣接する高森町と当市で相次いで、「富本銭」の存在が明らかとなり、この「伊那郡衙」周辺の地域が注目されていると聞いております。

「伊那郡衙」の存在は、律令時代という新たな国家形成がなされていったなかで、この地がその一翼を担っていたということを示しています。この地で日々生活する者として、そのことを思うと、古代のロマンというだけではない感慨を覚えずにはいられません。

地域の歴史を学ぶということが、ただ知識として覚えるというだけではなく、私たちが住むこの地の自然環境に人々がどのように関わってきたのかを考える一つのよすがとなるように、文化財保護に携わる者として、文化財を地域の中で生かす努力していかなければとあらためて思う次第であります。

最後になりましたが、文化財保護に深いご理解をいただき、ご協力いただきました地権者をはじめとする関係者の皆様に深く感謝し、刊行の辞とさせていただきます。

平成15年３月

長野県飯田市教育委員会
教育長　冨　田　泰　啓

例　　言

1. 本書は、集合住宅兼事務所建設に先立って実施された、飯田市座光寺恒川遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会の直営事業として実施した。
3. 調査は、平成13年度に発掘調査、平成14年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 調査実施にあたり、調査区グリットの設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づくものであり、基準点測量は株式会社ジャステックに委託した。
5. 今次調査地点は、平成元年度の恒川遺跡群範囲確認調査（以下、「H元調査」とする）により実施された箇所と一部重複し、H元調査箇所が今次調査（以下、「H13調査」とする）範囲の西側⅔を占めている。本書は、H13調査箇所と重複する箇所については、H元調査結果も含めて記載しているが、重複しない箇所については載せていない。

   また、H元調査は、伊那郡衙としての実態把握を目的とした確認調査のため、検出したすべての遺構について完掘していない。H13調査では、前回未発掘遺構と今回新たに確認された遺構のすべてを掘り下げて調査を行っている。そのため、遺構番号については、前回の調査で確認された遺構については同じ番号とし、今回新たに確認された遺構は連番を付した。
6. 発掘作業及び整理作業にあたり、作業の簡略化を図るために、遺跡名に略号を用いている。さらに、恒川遺跡群の場合は、遺跡が広範囲にわたるため、地籍ごとの略号に地番を付している。

   当概調査地点は、田中・倉垣外地籍にあたり、略号ＫＵＲに地番4604－１を付す。なお、H元調査についてはＫＵＲ4604－１とし、H13調査についてはＫＵＲ4604－１（Ⅱ）としている。
7. 本書では、遺構には以下の略号（竪穴住居址―ＳＢ、掘立柱建物址―ＳＴ、溝址―ＳＤ、土坑―ＳＫ、集石―ＳＩ）を使用している。
8. 本書の記述は遺構ごとに行い、遺構図は挿図とし、遺物図版及び写真図版は巻末に一括した。
9. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年度版の表示に基づいて示した。
10. 本書の遺構図の中に記した数字は、遺構については検出面から、住居址内については床面からの深さ（単位cm）を示す。遺構図の∴∴は焼土、［　　］は炭化物の範囲を示す。
11. 石器実測図の表現については、「T」－刃潰し加工、「S」－研磨を示す。
12. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、澁谷恵美子が行った。
13. 本書の執筆は、佐々木嘉和・澁谷が行い、澁谷が編集した。全体の総括を小林正春が行った。

    なお、遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は西大寺フォト　杉本和樹氏にそれぞれ委託した。
14. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　　次

序
例言
目次
第Ⅰ章　経過
　第1節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　調査組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第1節　自然環境 …… 4
　第2節　歴史環境 …… 4
第Ⅲ章　調査結果
　第1節　調査区の設定 …… 8
　第2節　基本層序 …… 8
　第3節　遺構 …… 11
　　(1)竪穴住居址(SB) …… 11
　　(2)掘立柱建物址(ST) …… 23
　　(3)土坑(SK) …… 23
　　(4)集石(SI) …… 24
　　(5)溝址(SD) …… 27
　　(6)小竪穴 …… 29
　　(7)土器・焼土集中 …… 29
　第4節　遺物 …… 34
　　(1)遺構及び土器・焼土集中出土遺物 …… 34
　　(2)遺構外出土遺物 …… 43
　　(3)石製品・土製品・石器 …… 43
第Ⅳ章　まとめ …… 47
抄録 …… 76

遺物観察表目次

表1　遺構及び土器・焼土集中出土遺物観察表 …… 34
表2　遺構外出土遺物観察表 …… 43
表3　石・土製品観察表 …… 43
表4　石器観察表 …… 43

挿図目次

挿図1　調査遺跡位置図 …… 3
挿図2　調査位置及び周辺遺跡位置図 …… 7
挿図3　基本層序 …… 8
挿図4　基準メッシュ調査位置図 …… 9
挿図5　調査区全体図 …… 10
挿図6　SB263・同カマド …… 12
挿図7　SB266・同カマド・267・同カマド・268・同カマド・269 …… 13
挿図8　SB304・305・同カマド …… 15
挿図9　SB305遺物出土状況 …… 16
挿図10　SB306・同カマド・307・同カマド …… 18
挿図11　SB306・307遺物出土状況 …… 19
挿図12　SB308・同カマド・同遺物出土状況 …… 21
挿図13　SB309カマド・310・311カマド・ST62 …… 22
挿図14　SK87～93 …… 25
挿図15　SI41・小ピット …… 26
挿図16　SI42 …… 27
挿図17　SD33・34 …… 28
挿図18　小竪穴22 …… 29
挿図19　土器集中1遺物出土状況 …… 31
挿図20　土器集中2・3遺物出土状況 …… 32
挿図21　焼土集中1・同遺物出土状況 …… 33
挿図22　SB263・266・304・305出土遺物 …… 36
挿図23　SB306出土遺物 …… 37
挿図24　SB307出土遺物 …… 38
挿図25　SB308・309・311・ST62・SK88・89・91・93・SD34出土遺物 …… 39
挿図26　土器集中1出土遺物 …… 40
挿図27　土器集中1・2出土遺物 …… 41

挿図28　土器集中３・焼土集中１出土遺物……42
挿図29　遺構外出土遺物……44
挿図30　ＳＢ266・268・308・ＳＤ33・遺構外出土石製品・石器・土製品……45
挿図31　遺構外出土石製品・石器……46

写真図版目次

巻頭図版１　恒川遺跡群を上空より望む
巻頭図版２　ＳＢ307・ＳＫ89・91出土遺物・蹄脚硯
図版１　調査区全景……53
図版２　ＳＢ263・同カマド・266・267 ……54
図版３　ＳＢ266カマド・267カマド・268・269・同カマド……55
図版４　ＳＢ305・同カマド・同遺物出土状況……56
図版５　ＳＢ306・同カマド・同遺物出土状況・307……57
図版６　ＳＢ307カマド ……58
図版７　ＳＢ308・同カマド ……59
図版８　ＳＢ309・同カマド ……60
図版９　ＳＢ309カマド・310・311カマド・ＳＴ62……61
図版10　ＳＫ87・88・ＡＮ38　Ｐ１遺物出土状況……62
図版11　ＳＫ89・90・92……63
図版12　ＳＫ91・同遺物出土状況……64
図版13　ＳＩ41・42……65
図版14　小竪穴22・ＳＤ33・34……66
図版15　土器集中１……67
図版16　土器集中２・３……68
図版17　焼土集中１……69
図版18　調査前・重機作業風景・測量作業風景……70
図版19　調査風景・座光寺小見学・調査後……71
図版20　ＳＢ263・305・306・307・308出土遺物……72
図版21　ＳＢ309・ＡＮ38　Ｐ１・ＳＫ91・土器集中２・３・焼土集中１出土遺物……73
図版22　土器集中１出土遺物……74
図版23　ＳＢ266・268・308・ＳＤ33・遺構外出土石製品・土製品・石器……75

第Ⅰ章　経　　過

第１節　調査に至るまでの経過

恒川遺跡群は、昭和52年に実施された一般国道153号座光寺バイパス（以下、「座光寺バイパス」とする）建設に先立つ緊急発掘調査により、古代伊那郡衙址と位置づけられて以来、昭和57年度から文化庁・長野県の補助を受け、伊那郡衙としての実態把握のため、範囲確認調査を継続的に実施している。特に、平成６・７年度に薬師垣外地籍において正倉の一部とみられる建物址群が確認されたことで、郡衙としての様相が明らかになりつつある。また、郡衙としてだけではなく、縄文時代以降の集落遺跡としても知られており、市内でも重要な遺跡の一つである。

平成13年３月30日付で、飯田市座光寺4604－１における集合住宅兼事務所建設にかかわる埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

当該工事計画地は、恒川遺跡群の田中・倉垣外地籍に所在するが、同地籍内では座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査以降、十数箇所で範囲確認調査や緊急発掘調査が実施されており、同遺跡群内でも特に遺構が密集しているところである。当概地は、平成元年度に範囲確認調査を実施した箇所と一部重複しており、前回の調査では縄文時代から中世までの遺構と縄文時代から中・近世に至る遺物が確認されている。その中でも特筆すべきは、掘立柱建物址の柱穴及び竪穴住居址から出土した蹄脚硯の破片の存在である。蹄脚硯の破片は、当該地の南東約30m離れた座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査でも確認されており、郡衙との関連が想定されるところである。このように、遺物の出土状況からもこの一帯が通常の集落とは異なる性格を有している可能性が指摘されている。

前述のような状況であることから、その保護について、開発者側と飯田市教育委員会とで協議し、本発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成13年６月５日に重機を入れて表土剥ぎを行い、同７日に基準点測量を実施し、同日作業員を入れて発掘調査を開始した。まず、平成元年度の調査範囲確認のため、今次調査地点と重複する西側半分について掘り下げを行った。引き続き、前回との重複のない東側についても遺構検出と掘り下げを行った。平成元年度の調査は、恒川遺跡群の伊那郡衙としての実態把握を主たる目的とした確認調査であったため、検出したすべての遺構について掘り下げを行っていない。今回、これら前回未掘部分と未調査部分で新たに確認された遺構については、完全に掘り下げて確認し、調査済のものは再度確認した。遺構の掘り下げと実測を順次行い、調査区の全景写真を撮り、７月９日に現地での作業を終了した。

第3節　調査組織

調査主体者

教　育　長　　冨田泰啓

総　　括　　小林正春

調査担当者　　佐々木嘉和　澁谷恵美子

調　査　員　　馬場保之　吉川金利　下平博行（～平成13年度）　伊藤尚志　坂井勇雄　羽生俊郎

作　業　員　　太田沢男　岡田直人　金井照子　北原　裕　木下早苗　小島康夫　小林千枝
瀬古郁保　田中　薫　樋本宣子　福沢トシ子　古林登志子　松下省三　松島　保
森藤美知子　柳沢謙二　吉川紀美子

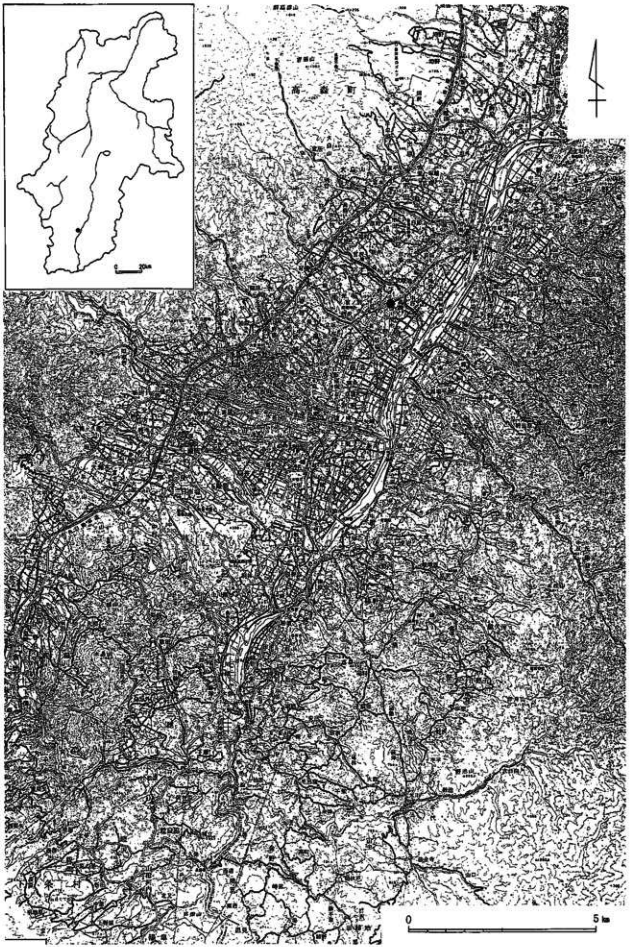
指　　導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

事　務　局

飯田市教育委員会

教育次長	久保田裕久
生涯学習課長	中島　修
〃　文化財保護係長	小林正春
〃　文化財保護係	馬場保之　澁谷恵美子　吉川金利　下平博行（～平成13年度） 伊藤尚志　坂井勇雄　羽生俊郎
学校教育課長	鈴木邦幸（～平成13年度）　伊藤昌治（平成14年度～）
〃　総務係長	高田　清
〃　総務係	宮田和久　福沢恵子（～平成13年度）



挿図１　調査遺跡位置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

長野県飯田市は、県南部を南北に並走する伊那山脈と木曽山脈とに挟まれた伊那谷の南端に位置し、天竜川はその中央部を南流する。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴う盆地と大きな段丘崖とによって構成された複雑な段丘地形であり、さらに天竜川の浸食によって形成された河岸段丘とによって特徴づけられている。この段丘は、『下伊那の地質解説』によると火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの５段階に編年されている。

恒川遺跡群がある飯田市座光寺地区は天竜川右岸にあり、市街地の北東４ｋｍ、飯田市の北端部に位置している。南は飯田市上郷地区となり、北は下伊那郡高森町、東は天竜川を挟んで同郡喬木村と境を接する。山間部を除いた地形は、南北にのびる断層によって形成される段丘崖を境として、俗に上段と呼ばれる洪積層の標高600m～470m前後の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積層の低位段丘Ⅱとに大別される。

上段は、木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曽川・栃ヶ洞川により扇状地が形成されるとともに、開析谷の浸食は著しい。この一帯は主要な果樹園地帯となっているが、中央自動車道・県道バイパスが南北に走り、宅地化も進んでいる。

下段は、数段の小段丘からなり、南側は比較的段丘面がよく残る。これに対して北側は、南大島川の押し出しにより段丘崖が不明瞭になっている。段丘崖直下に連続して存在する湧水が湿地帯を形成しており、この一帯が恒川遺跡群で確認される集落の主たる生産域となっていたとみられる。また、低位段丘Ⅱの先端は、南大島川と土曽川の押し出しによる台地であり、天竜川の氾濫原に面する自然堤防になっており、古代においてはこの氾濫原を生産域とする集落が形成されたと推測できる。低位段丘Ⅱは、天竜川の氾濫原に面した410m前後の南条面と、南北に長く地区内の北側では南大島川の上流へとの遡る別府面、そしてその上の430～440mの飯沼面とに分けられる。この一帯は古くからこの地区の中心地となっており、近年の座光寺バイパス開通により、沿線に大型店舗が進出している。

恒川遺跡群は、地形的には低位段丘Ⅱ飯沼面と別府面にあたる。今次調査地点は、恒川遺跡群の中央部にあたり、標高430m前後で、北西から南東に向かって低く、緩やかに傾斜している。恒川清水といわれる湧水池にも近く、利水的にも良好な場所といえる。

第２節　歴史環境

座光寺地区は、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と下段で遺跡の分布や性格が異なる。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。上段には縄文時代から弥生時代に

かけての遺跡が多く、特に山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等や、扇端から上段の段丘端部にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原・中島遺跡がある。下段には縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代ごとに立地が若干異なる。

旧石器時代の遺跡は上段においては確認されていないが、下段では終末から縄文時代草創期にかけての遺跡として、新井原・石行遺跡で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代には、上段では早期の遺跡として、押型文土器が出土した宮崎Ａ遺跡・米の原遺跡・大門原遺跡がある。中期になると多くの遺跡が知られているが、発掘調査例は多くはない。中期初頭の竪穴住居址と良好な土器群が出土した大久保遺跡や、扇状地扇央部分に立地し中期中葉から後葉の大集落とみられる大門原遺跡のほか、中期後葉では、宮崎Ｂ遺跡・座光寺原遺跡・宮崎南原遺跡がある。後・晩期は断片的な資料だが、後期前葉の注口土器等が出土した大笹遺跡がある。

また、南大島川沿いにある大井遺跡では、詳細時期不明であるが３基の集石が調査されており、川に面した臨時的な調理場と考えられている。さらに、南大島川の浸食により形成された谷に面した段丘上にもいくつかの遺跡が存在する。中期以外は明確ではないが、美女遺跡では断片的ではあるが、草創期の遺構・遺物が確認されているほか、早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれており、早期後葉～前期初頭の良好な土器群が得られている。特に早期では立野式期の集落が調査されており、立野式土器の成立過程の解明と当地方における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で重要な遺跡であるといえる。これ以外では、半の木遺跡で早期の断片的な資料が得られている。晩期終末には、美女遺跡では貯蔵穴群が、半の木遺跡では川に面した低地に水場遺構の存在が推定される。

下段では、恒川遺跡群で早期・前期の断片的な資料がある。中期では新井原・石行遺跡で中期後葉の大規模集落の一部が調査され、低位段丘における概期の大規模集落の存在が注目される。後期から晩期前半にかけての様相は明らかでない。晩期終末では、新井原・石行遺跡で竪穴住居址と土器群が確認されている。

弥生時代では、上段においてはこれまでに中期の遺跡はほとんど知られていないが、後期になると遺跡数が急増し、高燥な台地上へ集落展開する。人口増と生産手段の発達、畑作と稲作による複合農業を生産基盤としたことが背景として考えられる。後期前半では概期の標式遺跡である座光寺原遺跡や大門原Ｂ遺跡が、後半になると中島遺跡・宮崎Ａ遺跡等の調査例がある。中島遺跡は近年の調査で大規模な集落であることが改めて確認された。

下段では、中期前半は断片的な資料があるものの、これまでに遺構は認められていない。後半では、恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が確認されている。後期前半は遺構の分布が稀薄であり、居住空間が限定されていた可能性が指摘されている。後半になると恒川遺跡群のほぼ中心部に位置する田中・倉垣外地籍で密な分布がみられる。

古墳時代では、上段においては断片的な資料が得られているのみであり、古墳の数も下段に比べると少ない。しかし、段丘端部には前方後円墳の北本城古墳や未調査ではあるが浅間塚古墳がある。前者は当地方における初期横穴式石室を有し、後者は時期的に古く遡る可能性がある。また、北本城古墳と同種の石室を有し、銀製垂飾付耳飾を出土した畦地１号古墳など円墳群が北側に集中する。

下段では、前期には恒川遺跡群において前時代から続く集落展開がみられる。また、半の木遺跡で前期の住居址が確認されている。恒川遺跡群では中・後期になると分布域も拡大するが、後期末には新屋

敷・恒川B地籍など北側に分布が偏ることから、この時期の集落のあり方は必ずしも一様ではなく、終末期に至って何らかの政治的な規制が加わった可能性が指摘されている。古墳の数は、竜丘・松尾地区に次いで多く、下段においても北側に集中し、集落・生産域と隔絶された立地となる。前期古墳は未確認であるが、中期になると新井原・高岡古墳群において調査例がある。帆立貝形古墳の新井原12号古墳に近接する4号土壙から馬具を装着した馬歯骨が出土し、また新井原2号古墳でも3基の馬の墓が確認されるなど、馬とのかかわりが強い集団の存在が明らかになってきている。後期になると当地方でも有数の前方後円墳である高岡1号古墳があり、北本城古墳や畦地1号古墳と同様の横穴式石室を有する。円墳では老丈藪3号古墳・ナギジリ1号古墳等が調査されているほか、石塚1・2号古墳など、段丘崖下の傾斜地や土曽川・南大島川の支流の中流域、河川に面した傾斜地に小規模単位の円墳群がみられる。

奈良・平安時代は、上段では断片的な資料が得られているのみであり、現状では古墳時代以降は散在的に小規模な集落があったとみられる。

下段では、恒川遺跡群がかねてより、「伊那郡衙」ないし『三代実録』にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査で、「伊那郡衙」として認識された。政庁域等は特定できていないが、平成6年度には薬師垣外地籍で正倉群とみられる大型の掘立柱建物址が確認された。平成7・8年度には同地籍で区画溝から軒丸瓦を含む布目瓦が出土しているほか、周辺には古瓦の出土が確認されている。また、金井原瓦窯址では、半地下無段式窖窯1基と工房址2軒が調査され、西三河北野系とみられる瓦が出土している。近年、再確認された「富本銭」もこの下段北部からの出土とみられる。

さらに、恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小鍛冶遺構を伴う住居址が多いことから、前代の郡衙との関わりが指摘されている。新井原・石行遺跡では灰釉陶器蔵骨器を伴う火葬墓群が調査されており、官人層の墓所とも考えられている。この遺跡では、平安時代の遺構から押出仏が出土しており、高岡古墳群、古代伊那郡衙、寂光寺等との関連で注目されている。

中世になると上段では、段丘突端に北本城城跡・南本城城跡・浅間砦が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かした立地となっている。北本城城跡は調査により、4つの曲輪を主体とした居城的な城郭であることが確認された。16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等がなく、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡であり、防御施設の整った防御専門の城郭で、その性格からも北本城城跡との関連が考慮されている。

下段では新井原・石行遺跡で土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこのあたりが墓域であった様子がうかがえると同時に、六道思想定着以前の墓制として、経石を副葬する集石墓があったと考えられている。

近世では、大門原Dで火葬墓・土葬墓5基が調査されている。

このように、恒川遺跡群は奈良時代の古代伊那郡衙としての役割を担う以前から、連綿とした人々の生活痕跡を残す重要な遺跡の一つとして認識されている。

挿図２　調査位置及び周辺遺跡位置図

第Ⅲ章　調査結果

第１節　調査区の設定（挿図４）

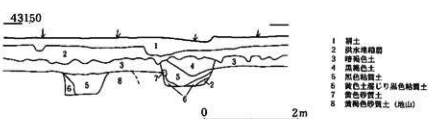
調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいている。ただし、Ｈ元調査時点では飯田市基準メッシュ図を用いていないことから、Ｈ元・13調査の図面は方位や重複する遺構から一つの図面としている。今次調査地点は、基準メッシュ図ＬＣ－75　８－48に位置する。

第２節　基本層序（挿図３）

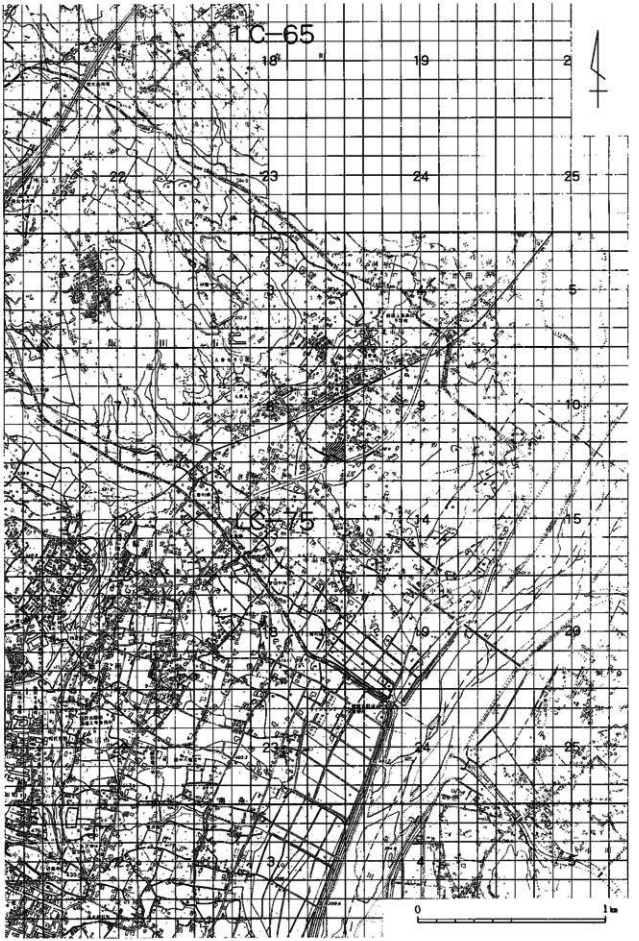
今次調査地点は、地形的には北から南にかけて低く緩やかに傾斜するが、調査区内はおおむね平坦である。Ｈ元調査時点では、表土から地山まで80cm 程度あったが、Ｈ13調査時点では上部が最大50cm 程度削平されていたため、西側では約30cm で地山に至るという状況であった。そのため、ここではＨ元調査の基本層序を示すものとする。

基本層序は、「恒川遺跡群　平成元年度範囲確認調査概報」(1990)によると、「耕土の下に正徳５年の洪水堆積層である（「未満水」という）が10～40cm 堆積し、さらに遺物包含層である暗褐色土が15～30cm 堆積し、黄色砂質土の地山に至る。遺構は、一部この暗褐色土上面で確認できるものとその下の地山の面で確認できるものがある。前者は奈良時代の溝址を後者は弥生時代の竪穴住居址を検出していることから、暗褐色土層の堆積は弥生時代後期以降である可能性が考えられる」という。 また、「遺物は調査前の表面観察によっても濃密な分布がみられ、各層に多量に含まれていたが、主な包含層は暗褐色土であり、縄文時代も若干含まれるが、主には弥生時代から中世の遺物が混在している。黒色土は中世に属すると考えられる遺構の覆土であり、この遺構は住居址の覆土である褐色土の中に構築されていた。」となっている。

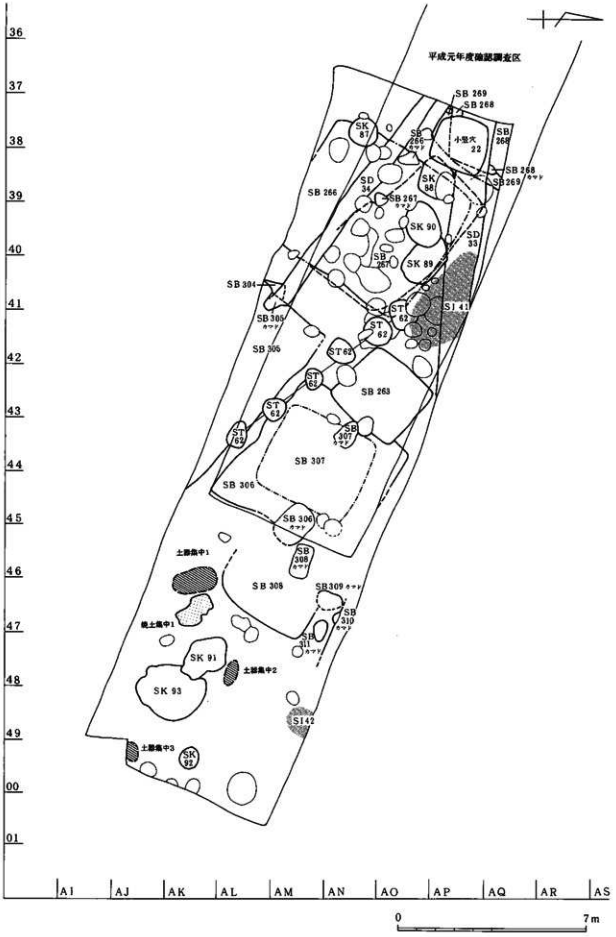
Ｈ13調査時点では未満水起源と推測される洪水堆積層はほとんど確認できなかった。遺構検出面についても、Ｈ元調査では調査対象となっていない東側部分は、遺物包含層（暗褐色土層）からの遺物出土量が多く、この暗褐色土層で遺構の検出ができることが望ましかったが、結果的には地山面での検出となった。



挿図３　基本層序



挿図4　基準メッシュ調査位置図


平成元年度確認調査区
SB 269
SB 268
SK 87
SB 266 カマド
小型穴 22
SB 268
SB 268 カマド
SB 269 カマド
SK 88
SD 34
SB 266
SB 261 カマド
SK 90
SD 33
SB 261
SK 89
SB 304
SB 305 カマド
SI 41
ST 63
ST 63
SB 306
ST 62
ST 61
SB 263
ST 63
SB 307 カマド
ST 63
SB 307
SB 306
SB 306 カマド
土器集中1
SB 308 カマド
SB 308
SB 309 カマド
SB 310 カマド
SB 311 カマド
礫土集中1
SK 91
土器集中2
SK 93
SI 42
土器集中3
SK 92
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
00
01
AI
AJ
AK
AL
AM
AN
AO
AP
AQ
AR
AS
0
7m

挿図5　調査区全体図

第3節　遺　構

（1）　竪穴住居址（ＳＢ）

①ＳＢ263（挿図６・22　　図版２・20）

遺　構　ＡＮ43を中心に全体を検出した。ＳＢ306・ＳＢ307(カマド)を切る。Ｈ元調査時点で住居址自体は調査済であるが、Ｈ13調査でカマドを検出した。ＳＢ307のカマドと切り合っており、両者のカマドの土層断面（挿図６）観察から本址の方がＳＢ307より新しいとみられる。

規模は2.9×2.6m、主軸方向Ｎ132°Ｅのやや歪んだ隅丸方形を呈し、検出面から床面までは21cm で、壁面はやや傾斜して立ち上がる。柱穴は４本（Ｐ１～Ｐ４）あり、うちＰ１とＰ３は柱痕を確認した。柱穴の床面からの深さは12～25cm である。床面は住居址中央からＰ１とＰ２の間（図中の破線の範囲）までが堅くタタキ締められている。床面には大小の穴があるが本址に伴うか不明である。

カマドはＳＢ306・307検出時に確認したため袖石のみである。南東壁中央に位置し、壁外に半分以上が張り出している。煙道部は確認できないが、石芯粘土カマドである。残存規模は1.02×0.7mである。

遺　物　カマドの前面から主に出土している。カマド付近で土師器（甕）・須恵器（坏）が出土しているほか、須恵器（坏・甕）・灰釉陶器（碗）がある。挿図22－３～５の須恵器(坏)は、いずれも軟質で、灰色を呈するが、十分な還元焔焼成によるものではないとみられる。同図―３の口縁部には漆かとみられる付着物がある。

時　期　出土遺物から平安時代前期（９世紀後半）と考えられる。

②ＳＢ266（挿図７・22・30　　図版２・３・23）

遺　構　ＡＮ39を中心にほぼ全体を検出した。Ｈ元調査時にカマドとＳＤ33を掘り下げた際に本址北側隅の壁の立ち上がりを検出している。今回、カマドを再度確認し、南側の壁面を検出し、掘り下げた。ＳＫ87～90・ＳＤ33・34に切られる。

北東側はＳＢ267と重複しているため、ＳＤ33で確認した本址の立ち上がりから規模を推定すると、(6.1)×5.5m、主軸方向Ｎ55°Ｗの隅丸方形になるとみられる。遺構の重複が多いため、ほとんど床面を確認したのみといってよいが、南側では現状で15cm 程、緩やかに立ち上がる壁面を確認した。床面には特に堅い箇所はなく、柱穴は大小のピットに切られているため明確に把握できなかった。南東側で一部周溝を確認した。

カマドはＳＤ34により壊されている。北西壁中央に位置する石芯粘土カマドであるが、袖石は原位置をほとんど留めていない。

遺　物　本址の北東側はＳＢ267と重複しており、他の遺構との重複も多いため、本址に伴うとみられるものは、南西側で出土したものがわずかであり、図化できたのは須恵器（高台付坏）の破片である。また、ＳＢ267との重複部分となるが、床面より石製模造品（勾玉）１点が出土している。

時　期　遺物が少なく、時期決定の根拠に乏しい。切り合い関係から古墳時代後期以降とみられる。

③ＳＢ267（挿図７　　図版２・３）

遺　構　ＡＯ40を中心に全体を検出した。ＳＢ266と同様、Ｈ元調査時にカマドと住居址の範囲を

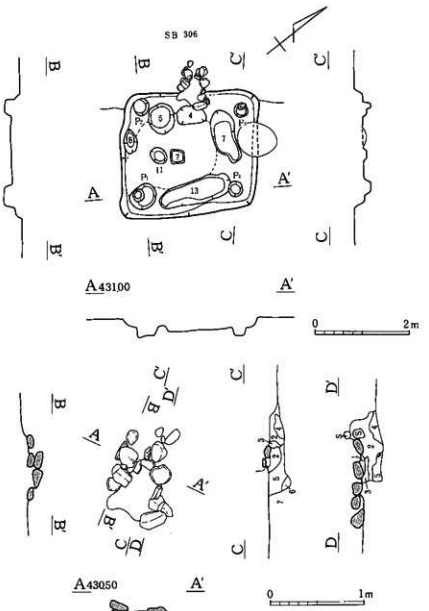
確認している。ＳＢ267は、ＳＢ266の上に貼床したものとみられるが、かろうじてカマドと北側隅の壁面の立ち上がりから、住居址の範囲を把握した。ＳＫ88・ＳＴ62・ＳＫ89・90・ＳＤ33に切られる。

規模は推定で６×３ｍ、主軸方向は推定でＮ135°Ｗの長方形を呈する。ほとんど床面の検出のみであり、２箇所に焼土を確認した。他の遺構との重複が著しく、柱穴は不明である。

カマドはほとんど残っておらず、南西壁面のほぼ中央に焼土と芯材とみられる石を確認した。

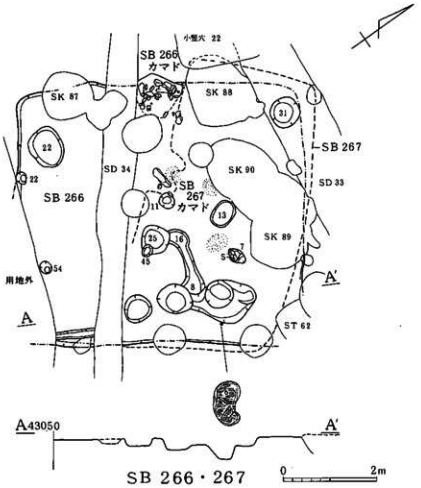
遺　物　カマド周辺で出土しているが、いずれも小破片である。

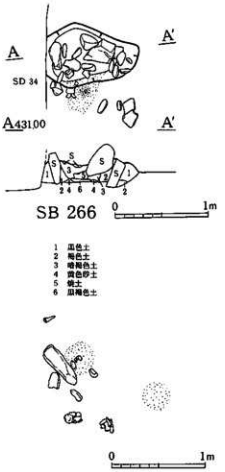
時　期　出土遺物は少ないが、ＳＢ266より新しいことから古墳時代後期以降とみられる。

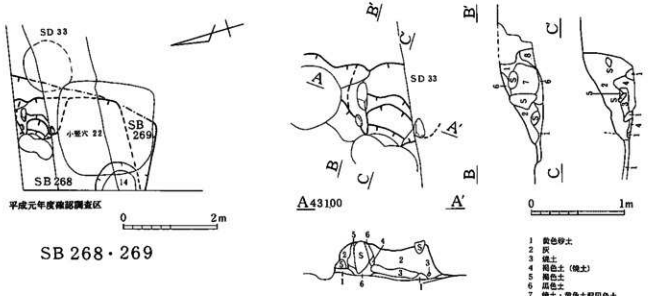


1	10YR3/3	暗褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	炭化物が多く混じる（SB306）
2	10YR5/3	鈍い黄褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	（SB306）
3	10YR5/4	鈍い黄褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	10YR5/3鈍い黄褐色土が混じる（SB306）
4	10YR7/8	黄褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	10YR5/3鈍い黄褐色土が混じる（SB306）
5	10YR5/2	灰黄褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	10YR6/5明黄褐色土が混じる（SB306）
6	10YR4/2	灰黄褐色土	SCL しまりややあり	粘性ややあり	（SB306）
7	10YR7/6	明黄褐色土	SCL しまりあり	粘性なし	10YR4/2灰黄褐色土が混じる

挿図６　ＳＢ263・同カマド







挿図 7　ＳＢ266・同カマド・267・同カマド・268・同カマド・269

④ＳＢ268（挿図７・30　図版３・23）

遺　構　ＡＱ38を中心に検出した。Ｈ元調査で住居址の南半分を調査しているが、Ｈ13調査の範囲内ではカマドのある東側¼が該当するのみである。住居址の範囲は重なるが、ＳＢ269を切る。また、小竪穴22・ＳＤ33に切られる。

南東側隅と南側隅の一部を確認したのみのため、規模は不明であるが、主軸方向N75°Ｗの隅丸方形を呈するものとみられる。壁高は50cm程でほぼ垂直に立ち上がる。重複が著しく、柱穴は不明である。

カマドは東側壁で確認した。カマドの南側はＳＤ33に切られ、石も抜き取られて崩れているが、残存部分で1.11×0.9mの石芯粘土カマドとみられる。

遺　物　覆土から臼玉・丸玉のほか、土器類は小破片のみである。

時　期　遺物が少なく、時期を特定できない。

⑤ＳＢ269（挿図７　図版３）

遺　構　ＡＱ38を中心に検出した。ＳＢ268と同様、Ｈ元調査で南半分を調査し、Ｈ13調査では、その¼が該当する。ＳＢ268・小竪穴22・ＳＤ33に切られる。南側と東側壁の一部を確認したのみのため、規模は不明であるが、主軸方向はN65°Ｗの隅丸方形を呈するものとみられる。主柱穴は不明である。壁高は55cmでやや緩やかに立ち上がる。

Ｈ13調査では調査区外となるが、Ｈ元調査では東側の壁でＳＤ268に切られたカマドの袖石の一部と焼土とを確認している。

遺　物　小破片のみである。

時　期　遺物が少なく、時期を特定できない。

⑥ＳＢ304（挿図８・22　図版４）

遺　構　ＡＬ41を中心に検出した。当初本址を確認できず、結果的にＳＢ305を先行して掘り下げた。ＳＢ305の覆土土層の観察から、土層図（挿図８）の住居址土層Ａ－Ａ´の３層上面が本址の床面とみられ、ＳＢ305の上に貼床しているとみられるが、本址の床面は堅くなかったことから、ＳＢ305の掘り下げ時に本址の床面を掘り抜いてしまい、壁のごく一部を確認したのみである。ＳＤ34に切られる。住居址の大部分は調査区外となることから、規模については不明である。

遺　物　本址に伴うとみられる遺物は土師器（甕）片がある。

時　期　ＳＢ305との関係から、古墳時代とみられる。

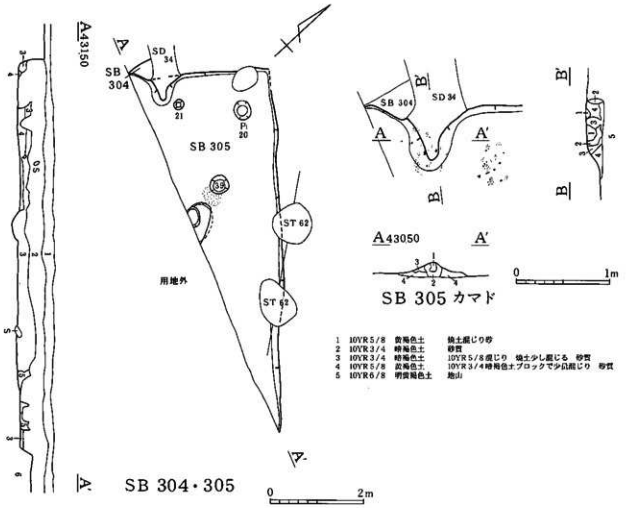
⑦ＳＢ305（挿図８・９・22　図版４・20）

遺　構　ＡＭ42を中心に検出した。南側が調査区外となるため、全体の¼程度を調査したのみである。ＳＢ304・ＳＴ62・ＳＤ34に切られる。規模は不明であるが、北東側で7.7mあり、一辺８m程度の比較的大型の住居址で、N49°Ｗの方形を呈するものとみられる。壁高は、26～55cmでやや直に立ち上がる。柱穴は北側隅に１箇所（Ｐ１）確認した。床面は堅くタタキ締められている。

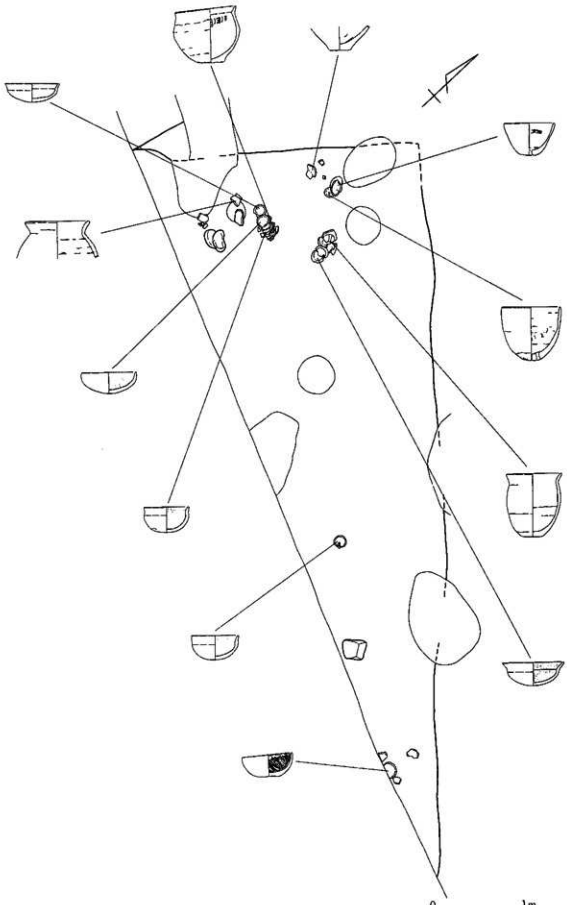
カマドは、ＳＤ34に壊されているため、北西側壁に若干の高まりを残すのみで、焼土が散在していた。本址の土層断面にはカマドはかかっておらず、規模は不明である。

遺　物　出土状況は挿図９によるが、カマドの北側床面上から主に出土し、土師器（坏・内黒坏・甕・甑）など比較的多い。挿図22－20・21の甑と甕は大きさからセットで使用されていたものとみられる。甕には上半部に煮こぼれによる付着物がある。

時　期　住居址床面からの出土遺物から古墳時代後期（６世紀前半）と考えられる。



挿図８　ＳＢ304・305・同カマド



挿図９　ＳＢ305遺物出土状況

⑧ＳＢ306（挿図10・11・23　図版５・20）

遺　構　ＡＭ45を中心に全体を検出した。Ｈ元調査で本址のカマドを確認している。Ｈ13調査では検出面で本址のプランを明確に把握できず、順次掘り下げていった。また、その際ＳＢ307のカマドを検出したため、本址とＳＢ307の前後関係を検出面で把握できなかった。本址は平面的に歪んでいるため、未確認の住居址との切り合う可能性もあるが、おそらく一辺５ｍ前後となると考えられる。カマドの土層断面（挿図10　Ｄ－Ｄ´）で本址の南東側壁を確認した。同図13・15層は住居址床面とみられ、これらを本址が切っている。この床面がＳＢ308のものかは確認できなかった。

本址の床面を確認できたのはカマドの南側と北側壁の一部で、全体を掘り下げた結果、本址のほぼ中央が低くなるという状況になった。これをＳＢ307のカマドの位置やレベルからみると、本址中央の低い部分がＳＢ307の範囲となる可能性がある。ＳＢ307のカマドは袖石がほぼ残っており、ＳＢ307の方が新しいと考えられる。本址の主軸方向はカマドからＮ125°Ｅであり、壁高は40cm 前後で緩やかに立ち上がる。主柱穴は把握できなかった。

カマドは南東側壁にあり、石芯粘土カマドで、煙道は確認できなかったが、両袖石は比較的良く残っていた。残存規模は0.9×1.3mである。カマド内には焼土が残っており、全面にも焼土が広がっている。

遺　物　カマド周辺の遺物を本址に伴うものとした。遺物はカマド内及びカマド南西側にまとまっている。それ以外のものはＳＢ307との混同がありうる。出土状況は挿図11のとおりである。遺物には、土師器（ロクロ調整の坏・皿・碗・甕）・黒色土器（坏・皿・碗）須恵器（坏・皿）がある。

時　期　カマド周辺の遺物から、平安時代前期（９世紀後半）と考えられる。

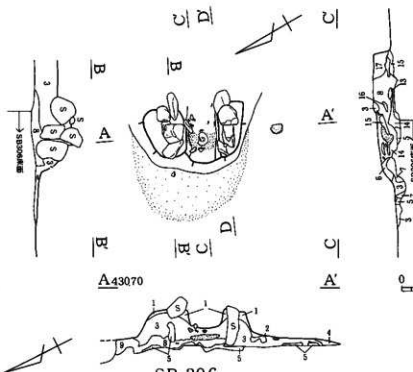
⑨ＳＢ307（挿図10・11・24　巻頭図版２・図版５・６・20）

遺　構　ＡＮ44を中心に検出した。ＳＢ306の項で述べたように、本址はＳＢ306を切っているとみられ、その規模は推定で一辺３ｍ程になる。壁高はＳＢ306床面からの深さで20cm 程度である。主柱穴は不明。主軸方向はカマドからＮ56°Ｅとなる。

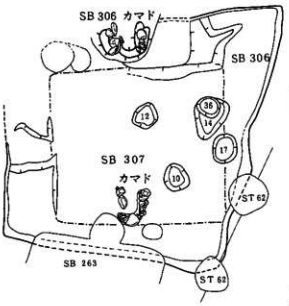
カマドはＳＢ306検出時に確認したため、袖石のみである。石芯粘土カマドとみられ、ＳＢ263に切られており、煙道及び北側奥の袖石は欠けているが、比較的良く残っている。残存規模は0.9×0.8mである。カマド中央には焼土が残っており、前面には炭・灰が広がっている。さらにその東側には石・炭・焼土が散在しており、カマドの残骸ともみられる。ここからは本址カマド周辺から出土した遺物と接合する破片が出土しているが、本址との関係は明確ではない。

遺　物　ＳＢ306と重複することから、カマド内と周囲の遺物を本址のものとした。また、カマド出土遺物と接合関係にある破片が出土した石のある付近からの出土遺物も含めている。遺物はカマド内及びカマドの東側に近接して出土している。遺物の出土状況は挿図11のとおりである。出土状況は良好で、土師器（ロクロ調整の坏１）・黒色土器（坏２）と灰釉陶器（皿）が重ねられたままで横倒しになったもの（下から挿図24－８・２・７・16の順）がある。墨書土器は、挿図24－６の坏底部に「ハ」とあり、同一３は墨書かどうか疑問が残るが、坏の側面に「ハ」の字状のものがみえる。遺物はほかに土師器（ロクロ調整の坏・甕）・黒色土器（皿）・須恵器（坏）がある。

時　期　カマドを中心とする遺物からみて、本址の時期は平安時代前期（９世紀後半）と考えられる。遺物から、ＳＢ306よりも本址の方が新しいとみられる。



SB 306

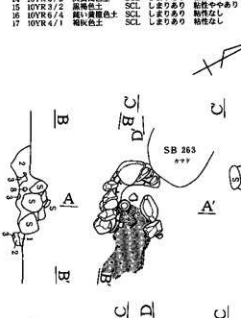


SB 306・307

1	10YR 5/4	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 4/3	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
3	10YR 4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
3'	10YR 4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
4	10YR 5/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
5	10YR 6/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
6	10YR 3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
7	10YR 7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
8	10YR 3/1	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
9	10YR 7/4	鈍い黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし
10	10YR 3/3	暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
11	10YR 7/8	黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし
12	10YR 3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
13	10YR 6/8	黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
14	10YR 5/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
15	10YR 3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
16	10YR 6/4	鈍い黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし
17	10YR 4/1	褐灰色土	SCL	しまりあり	粘性なし

10YR4/2灰黄褐色土が混じる。東方向に段が現れによる
10YR4/4鈍い黄褐色土ブロック、炭化物、焼土が混じる
10YR4/4鈍い黄褐色土ブロック、炭化物、
焼土が混じる。工事によりやや少ない
10YR 7/4鈍い黄橙色土が混じる
10YR 4/2灰黄褐色土がやや混じる
10YR 7/6明黄褐色土が混じる 焼土がやや混じる
10YR 3/2黒褐色土が混じる
炭化物が混じる
10YR 5/2灰黄褐色土が混じる
10YR 5/2灰黄褐色土が混じる

1層と最初期段階の埋土 10層は10層下テフに切られる
10YR 6/8黄橙色土が混じる
10YR 5/8黄橙色土が混じる 上面は焼土が混じるものもある



SB 307

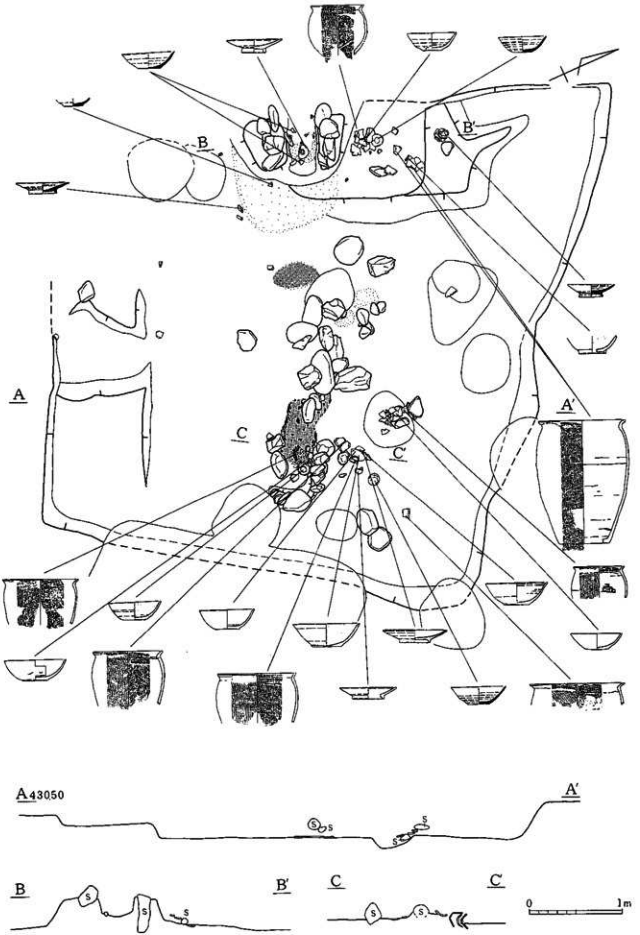
1	10YR 7/4	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
2	10YR 5/3	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
3	10YR 6/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし
4	焼土				
5	10YR 4/3	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
6	10YR 6/4	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
7	10YR 4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性あり
8	10YR 7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
9	10YR 4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
10	10YR 7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり
11	10YR 7/8	黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし

焼土が少々混じる

炭化物、焼土が混じる

10YR 7/6明黄褐色土が混じる
10YR 4/2灰黄褐色土が混じる
10YR 5/3鈍い黄褐色土が混じる

挿図10　ＳＢ306・同カマド・307・同カマド



挿図11　ＳＢ306・307遺物出土状況

⑩ＳＢ308（挿図12・25・30　図版７・20・23）

遺　構　ＡＭ47を中心に全体を検出した。ＳＢ306・309・310と切り合い関係にあるが、いずれも検出面での確認ができなかった。また、ＳＢ306で述べた同址カマド土層断面（挿図10　Ｄ－Ｄ´）の13または15層が本址のものか明確ではなく、ＳＢ306との前後関係は不明である。ＳＢ309・311との切り合い関係は平面的にも断面でも把握できなかった。本址の床面の下には別の住居址の床面が確認できるが、この住居址の平面プランは不明である。

他の住居址との切り合いのため、南東側壁を確認したのみである。この部分で一辺3.75m、壁高12cmで緩やかに立ち上がる。主柱穴は不明である。

カマドは北西側で確認した。規模は1.15×0.6m、主軸はＮ76°Ｗである。並列する石の間に焼土があり、通常の石芯粘土カマドとは形状が異なる。残存する石は元位置を保っているとみられ、カマド以外の可能性も考えられる。この東側には炭が1.5×２m範囲に広がっており、この面を床面ととらえたが、堅くはない。

遺　物　炭及びカマドの南側に遺物が散在しており、本址に伴うか疑問もある。土師器（ロクロ調整の坏・甕・甑）・黒色土器（坏）・灰釉陶器（皿）・土錘がある。甑（挿図25－３）は底部のみであるが、焼成後に２孔開けられており、甕等からの転用品とみられ、内側には炭化物が付着している。同一４はロクロ成形の甕の可能性がある。また、石器として抉入打製石庖丁・敲打器がある。

時　期　住居址覆土及び床面からの出土遺物から平安時代前期（９世紀後半）と考えられる。

⑪ＳＢ309・311（挿図13・25　図版８・９・21）

遺　構　ＡＮ47・ＡＭ47を中心に検出した。いずれもカマドを確認したのみで、カマドの方向・住居址範囲がわからず、両者の切り合い関係は不明である。ＳＢ310に切られる。

ＳＢ309のカマドは両袖石の一部が残っているのみで、規模は不明である。カマドの周囲でＳＢ309とみられる床面の一部が確認できる。袖石の下に炭化物の層があり、作り替えられたか別の住居址が存在する可能性がある。

ＳＢ311のカマドは炭・焼土が残るのみである。

遺　物　遺物はそれぞれカマドから出土しているが、ごくわずかである。ＳＢ309は土師器（手づくね）、ＳＢ311は土師器（甕）がある。

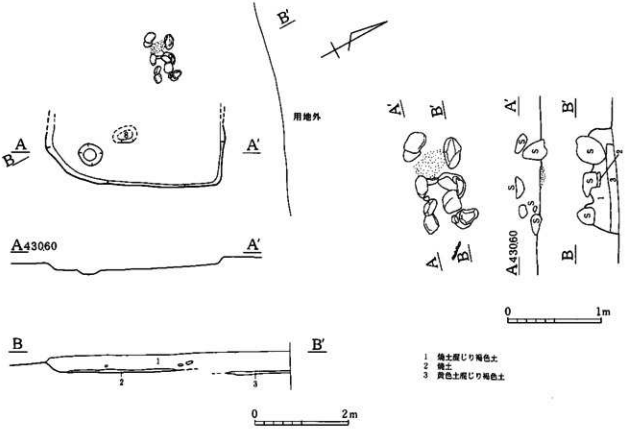
時　期　いずれも時期決定の要因に乏しいが、ＳＢ311は平安時代の可能性がある。

⑫ＳＢ310（挿図13　図版９）

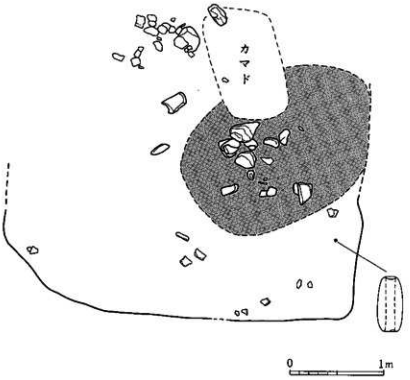
遺　構　ＡＮ48を中心に検出した。ＳＢ309・311を切るようにもみえるが、明確ではない。南壁側の一部を確認したのみで規模等は不明である。カマドはＳＢ309と311の間にわずかに残っていたのみで、構造・規模等は不明である。

遺　物　覆土中より小破片が出土しているのみである。

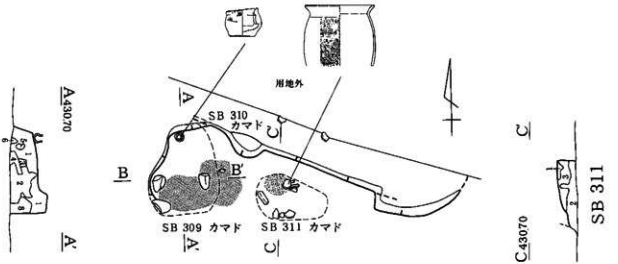
時　期　不明。

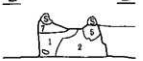


1 10YR 3/3 暗褐色土 SCL しまりあり 粘性なし
2 10YR 4/4 褐色土 SCL しまりあり 粘性なし 10YR 8/8 黄橙色土が縁じる
3 10YR 4/3 鈍い黄褐色土 SCL しまりあり 粘性なし 10YR 7/6 明黄褐色土が縁じる（3層上部は床面とみられる）



挿図12　ＳＢ308・同カマド・同遺物出土状況





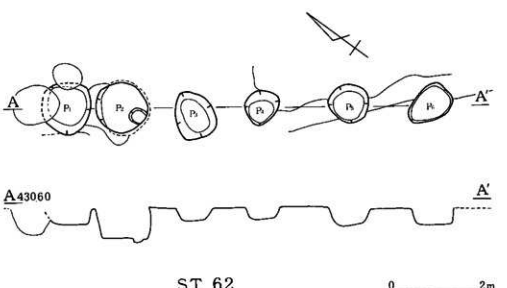
SB 309

SB311

1	10YR7/8	黄橙色土	SCL	しまりあり	粘性なし	焼土が混じる　硬くたたき締められている
2	10YR7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	焼土が混じる
3	10YR3/3	暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	炭化物、焼土が混じる

SB309

1	10YR3/3	暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	10YR7/6明黄褐色土、炭化物が混じる
2	10YR7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
3	10YR7/6	明黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR3/3暗褐色土が混じる
4	10YR3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	
5	10YR7/8	灰褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
6	10YR5/6	黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR2/3	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性ややあり	炭化物多く混じる
8	10YR5/3	鈍い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	



ST 62

挿図13　ＳＢ309カマド・310・311カマド・ＳＴ62

（2） 掘立柱建物址（ＳＴ）

①ＳＴ62（挿図13・25　図版９・カラー図版２）

遺　構　ＡＭ44を中心に検出した。Ｈ元調査の際に一方向に並ぶ６本の柱穴を確認した。ＳＢ266・267・305・306を切る。H13調査で周囲を調査したが、これに対応する柱穴は確認できず、掘立柱建物址としての範囲は不明である。

柱穴は６本・５間で、芯芯距離は北側３間（Ｐ１～Ｐ４）が1.4m、南側２間（Ｐ４～Ｐ６）が1.8m、Ｐ１からＰ６までが7.8mになる。検出面からの深さ30～40㎝、Ｐ２はやや深く70㎝程になり、さらに柱痕の掘り込みがある。柱軸方向はＮ33°Ｗになる。

遺　物　Ｐ２の柱痕の底から蹄脚硯１片（挿図25－９）が出土した。蹄脚硯はこの他にＨ元調査（今次調査範囲とは重複しない西側部分）で１片（同図―10）、今次調査地点の南側にある座光寺バイパスでの調査で２片（同図―11・12）が出土している。いずれも小破片であるが、これらは同一個体もしくは同種の硯とみられる。参考のため実測図を載せたが推定復元図である。

時　期　住居址との切り合いから平安時代以降とみられるが、他に遺物がなく、本址の時期及び蹄脚硯との関係は明確ではない。

（3） 土坑（ＳＫ）

①ＳＫ87（挿図14・25　図版10・21）

遺　構　ＡＮ38を中心に全体を検出した。ＳＢ266を切る。規模は1.1×1.0m、深さ0.4～0.5mの円形の土坑で、断面逆台形を呈する。東寄りに深いところがあり、柱痕の可能性がある。本址を掘り下げる際に壁面にかかって土師器（甕）１個体（挿図25－13）が出土したが、これは隣接するグリットピット（ＡＮ38　Ｐ１）に伴うものであり、本址がＰ１を切っている。

柱穴の可能性があるが、これに対応する柱穴は確認できなかった。

遺　物　本址からはグリットピットの甕の破片が出土しているのみである。

時　期　Ｐ１から出土した遺物から古墳時代後期以降とみられる。

②ＳＫ88（挿図14・25　図版10）

遺　構　ＡＰ39を中心に全体を検出した。ＳＢ266・267を切り、小竪穴22に切られる。規模は1.55×1.24m、深さ0.46mの楕円形を呈する。小竪穴床面よりも掘り込みが深かったため、ほぼ全体を確認することができた。北側の小ピットに切られる。長軸方向Ｎ５°Ｅ、底部平坦、壁面は直に立ち上がる。性格は不明である。

遺　物　底部から四耳壺片が出土している。

時　期　出土遺物から中世とみられる。

③ＳＫ89（挿図14・25　巻頭図版２・図版11）

遺　構　ＡＤ41を中心に全体を検出した。ＳＢ266・267・ＳＤ33を切り、ＳＫ90に切られる。規模は2.0×1.38m、深さ0.35mで不整楕円形を呈する。長軸方向はＮ40°Ｗである。壁面は直に立ち上がる。性格は不明である。

遺　　物　　覆土より出土した青磁（碗）片は、同一個体の小片に連弁文様が確認できる。
時　　期　　出土遺物から古代末から中世頃とみられる。

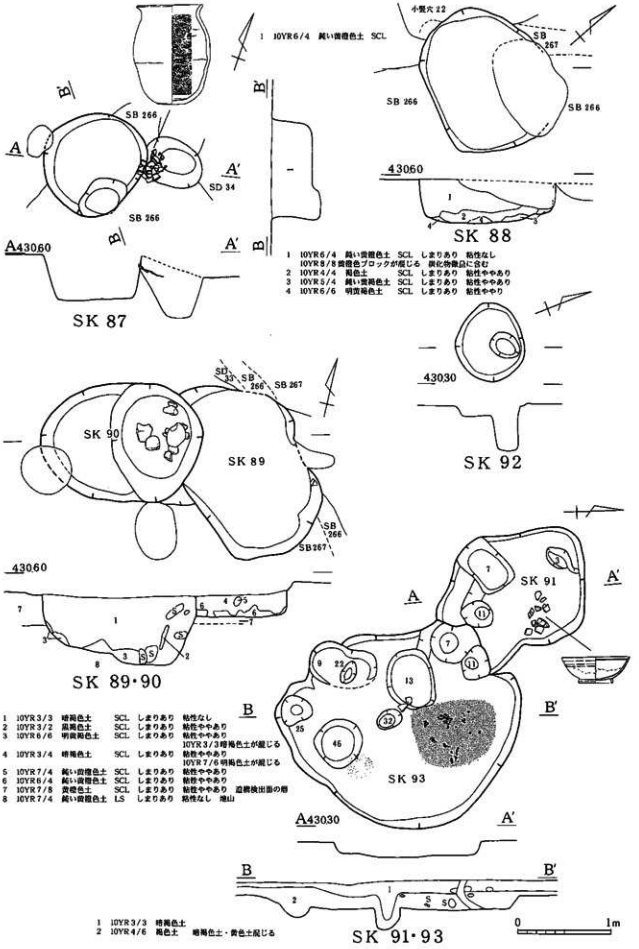
④ＳＫ90（挿図14　　図版11）
遺　　構　　ＡＯ40を中心に全体を検出した。ＳＢ266・267・ＳＫ89を切る。規模は1.72×1.25m、深さ0.5～0.79mで楕円形を呈する。調査時には、１つの土坑として把握したが、底部の深さは北東側がやや深く、覆土中に石が混入していることから、本来は２つの土坑の可能性がある。性格は不明である。
遺　　物　　図化していないが、付近から常滑小片が出土している。
時　　期　　切り合い等から中世以降とみられる。

⑤ＳＫ91（挿図14・25　　巻頭図版２・図版12・21）
遺　　構　　ＡＫ48を中心に全体を検出した。ＳＫ93を切る。規模は1.8×1.32m、不整形な土坑である。深さは0.3m程であるが、部分的に底部に穴状の掘り込みがある。長軸方向はN50°Ｗとなる。壁は直に立ち上がる。性格は不明である。
遺　　物　　出土状況は挿図14によるが、灰釉陶器（碗）と覆土から土師器（坏）が出土している。
時　　期　　出土遺物から平安時代後期（11世紀）と考えられる。

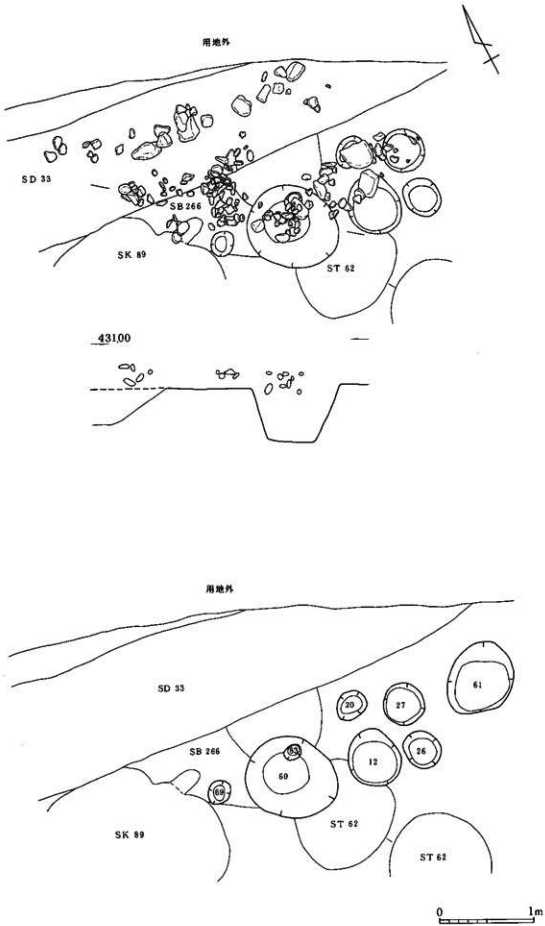
⑥ＳＫ92（挿図14　　図版11）
遺　　構　　ＡＫ00を中心に全体を検出した。規模は0.85×0.72m、不整円形を呈する。深さは0.2mの土坑の一部がさらに70cm深くなっており、柱痕とみられるが、これに対応する柱穴は確認できない。
遺　　物　　なし。
時　　期　　不明。

⑦ＳＫ93（挿図14・25）
遺　　構　　ＡＫ49を中心に全体を検出した。規模は2.6×2.08mの不整形を呈する。底部までの深さは0.3m程であるが、ＳＫ91と同様、穴状の掘り込みがあり、２箇所に焼土がある。性格は不明である。
遺　　物　　覆土から弥生（甕）・土師器（壺）が出土している。
時　　期　　時期は特定できない。

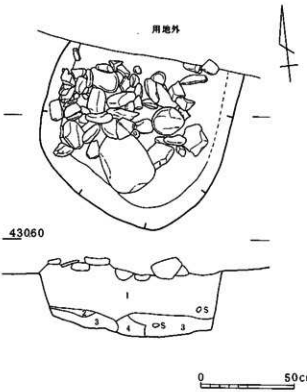
（４）　集石（ＳＩ）
①ＳＩ41（挿図15　　図版13）
遺　　構　　ＡＮ43を中心に全体を検出した。重複するＳＤ33・ＳＫ89・ＳＢ266よりも上部で検出しており、これらよりも新しい遺構である。南北1.8×東西3.5mの範囲に石が散在する。石の大きさは５～30cmで、ＳＤ33上の石は一見して並んでいるようだが、規則性はみられない。石を取り外すとその下に小ピットが７つあったが、上部の集石との関係は把握できなかった。性格は不明である。
遺　　物　　なし。
時　　期　　切り合い等から中世以降とみられる。


SK 87
SK 88
SK 89
SK 90
SK 89・90
SK 91
SK 92
SK 93
SK 91・93
SB 266
SB 267
SD 34
A43060
43060
43030
A43030
小型片 22
1 10YR6/4 鈍い黄橙色土 SCL
1 10YR6/4 鈍い黄橙色土 SCL しまりあり 粘性なし
10YR5/8 黄橙色ブロックが混じる 炭化物微量に含む
2 10YR4/4 褐色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
3 10YR5/4 鈍い黄褐色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
4 10YR6/6 明黄褐色土 SCL しまりあり 粘性ややり
1 10YR3/3 暗褐色土 SCL しまりあり 粘性なし
2 10YR3/2 黒褐色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
3 10YR6/6 明黄褐色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
10YR3/3暗褐色土が混じる
4 10YR3/4 暗褐色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
10YR7/6明褐色土が混じる
5 10YR7/4 鈍い黄橙色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
6 10YR6/4 鈍い黄橙色土 SCL しまりあり 粘性ややあり
7 10YR7/8 黄橙色土 SCL しまりあり 粘性ややあり 遺構検出面の層
8 10YR7/4 鈍い黄橙色土 LS しまりあり 粘性なし 焼山
1 10YR3/3 暗褐色土
2 10YR4/6 褐色土 暗褐色土・黄色土混じる
0 1m

挿図14 ＳＫ87～93



挿図15　S I 41・小ピット



挿図16　ＳＩ42

1　10YR 3/2　黒褐色土　SCL　しまりあり　粘性ややあり
　　炭化物が混じる
2　10YR 3/2　黒褐色土　SCL　しまりあり　粘性ややあり
　　10YR 7/6 明黄褐色土ブロックが混じる
3　10YR 5/4　鈍い黄褐色土　SCL　しまりあり　粘性ややあり
4　10YR 7/6　明黄褐色土　SCL　しまりあり　粘性ややあり

②ＳＩ42（挿図16　図版13）

遺　構　ＡＭ49を中心に検出し、北側は調査区外となる。現状で確認できる石の範囲は、南北0.73m×東西0.85mである。石は南側に人頭大のものがあるほか、7～15cm大のもので並び方に規則性はない。石の下にあった土坑は、現状で南北0.91m、東西1.02m、深さ0.36mの不整形のものである。石の下の層（挿図16　1層）には炭化物も混じっている。性格は不明である。

遺　物　なし。

時　期　不明。

（5）　溝址（ＳＤ）

①ＳＤ33（挿図17・30　図版14・23）

遺　構　ＡＰ38～ＡＰ41を中心にＨ元調査で検出し、Ｈ13調査で再確認した。東側は調査区外となり、西側はＨ元調査区域へ延びている。全体の長さは北・西側ともにＨ元・13調査の区域外になることから不明である。Ｈ元調査で28m確認しており、今回では長さ８ｍ強、長軸方向Ｎ75°Ｗ、幅1.05～1.25ｍ、検出面からの深さは0.45m、断面逆台形の溝である。ＳＢ267・268・269を切り、小竪穴22に切られる。同じ幅で直線的に延びることから、Ｈ元調査では「何らかの区画としての性格が考えられる。」としている。

遺　物　覆土から出土した挿図30－９の磨製石庖丁は孔が貫通していない。穿孔を中断し、孔のある方を刃部にして再度作り直されているとみられる。このほか、小破片があるのみである。

時　期　本址に伴う遺物は明確ではなく、切り合い関係から古墳時代以降とみられる。

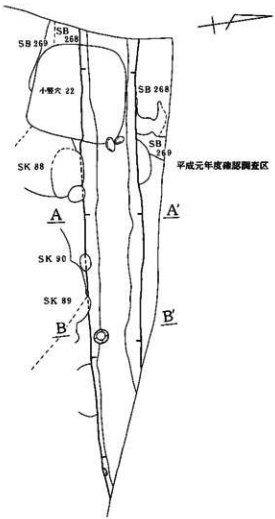
②ＳＤ34（挿図17・25　図版14）

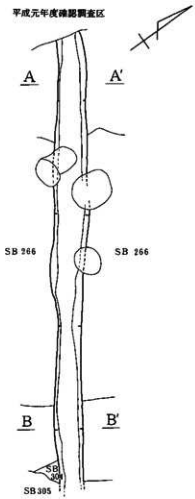
遺　構　ＡＯ38～ＡＭ41を中心にＨ元調査で検出、Ｈ13調査で再確認した。ＳＢ266・304・305を切る。南東側は調査区外となり、北西側はＨ元調査区域内で途切れる。幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.25m、断面逆台形の溝である。長さ9.6m、長軸方向Ｎ55°Ｗである。

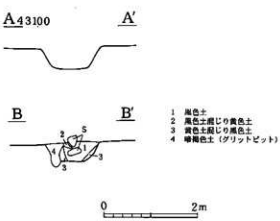
覆土土層は、上層では暗褐色土、下層では10ＹＲ６/４　にぶい黄橙色土（10ＹＲ　８/８　黄橙色土ブロック混）である。

遺　物　須恵器（坏）のほか、図化していないが短脚１段スカシ高坏脚部小片が出土している。

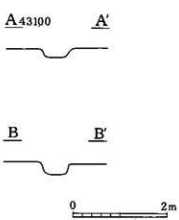
時　期　切り合い関係から古墳時代以降とみられる。





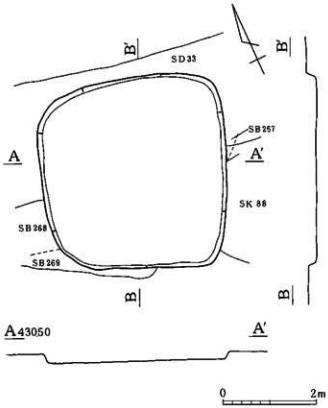


SD 33



SD 34

挿図17　SD33・34



挿図18　小竪穴22

（6）　小竪穴

①小竪穴22（挿図18　　図版14）

遺　　構　　ＡＰ38を中心に全体を検出した。ＳＢ268・269・ＳＤ33・ＳＫ88を切る。Ｈ元調査で確認し完掘している。主軸方向は不明であるが、約２ｍ四方のやや歪んだ方形を呈し、検出面から床面までの高さは約10cmで、壁はやや緩やかに立ち上がる。柱穴は内部にはなく、外側でも柱穴は確認できなかった。規模、カマドがないことから貯蔵施設など居住以外の目的が考えられる。

遺　　物　　なし。

時　　期　　形態や切り合い関係から中世とみられる。

（7）　土器・焼土集中

Ｈ元調査では未調査部分である調査区内の東側（ＳＢ308より東側）は、遺物包含層から多くの遺物が出土したことから、当初Ｈ元調査との重複箇所で把握していた遺構検出面（地山）よりも上の暗褐色土面で検出を試みたが、西側と同様、最終的には地山まで掘り下げての確認となってしまった。４箇所に土器及び焼土がまとまっていた。暗褐色土中に遺構の掘り込みがあると考えられることから、調査区内に土層確認のためのベルトを設定して掘り下げたが、遺物集中箇所ではベルトの土層からも遺構を把握できなかった。そのため、遺構番号を付さず、土器・焼土集中として以下記載する。

①土器集中１（挿図19・26・27　　図版15・22）

ＡＫ46・ＡＫ47を中心に検出した。南北に細長く1.4×１ｍの範囲に遺物が集中している。出土状況については挿図19のとおりである。遺物は平面的に広がっており、遺構としては確認できなかったが、地山を掘り込んでいるとみられる。遺物の残存状況は良好で、意図的に破砕されたようではない。土圧による破損はあるものの、ほぼ元位置を保っているものとみられる。

本来住居址床面に置かれていた可能性もあるが、土師器（甕・甑）があるものの坏・高坏の割合が圧倒的に多く、意図的に一括して置かれたとみられる。状況から住居址以外の性格も考えられるが、特定できなかった。出土遺物は土師器（坏13・高坏９・甕１・甑１）であり、いずれもほぼ完全な形に復元できる。坏・高坏は全面にヘラミガキがなされ、特に挿図26－１～４の坏、同―15～18・挿図27－１・４の高坏は、坏部や脚部に暗文状に施されたヘラミガキが確認でき、暗文が確認できないものも含めて、いずれも丁寧な作り方をしている。土師器以外の遺物はなかった。

土器集中１の東側には焼土集中１があり、これとの関連も想定し得る。

時期は、古墳時代中期（５世紀中頃）と考えられる。

②土器集中２（挿図20・27　図版16・21）

ＡＬ48を中心に検出した。0.7×0.4mの範囲に土師器（坏１・高坏３）がまとまって出土した。出土状況については挿図20のとおりである。遺構としては確認できなかったが、地山を掘り込んでいるとみられる。土器集中１と同様、意図的に破砕されてはおらず、一括して置かれたものとみられる。時期的にも土器集中１とほぼ同時期とみられるが、離れていることから別のものと捉えた。

挿図27－８～10の高坏は、暗文状のヘラミガキを施した丁寧な作りのものであり、土師器製作上、土器集中１との類似点が認められ、同様の性格を有するものであることが考えられる。土師器以外の遺物はない。

時期は、古墳時代中頃（５世紀後半）と考えられる。

③土器集中３（挿図20・28　図版16・21）

ＡＪ00を中心に検出した。土師器（甕）が立った状態で出土している。出土状況は挿図20のとおりである。挿図28－１の土師器（甕）の下に、同図―３の土師器（甕）を敷いたような状況であった。東側40cm 離れたところに炭化物塊がある。土師器の甕は地山を浅く掘り込んでいるとみられる。南側は調査区外となるが、さらに区外へも広がっている可能性がある。住居址の可能性があるが、遺構としては把握できなかった。

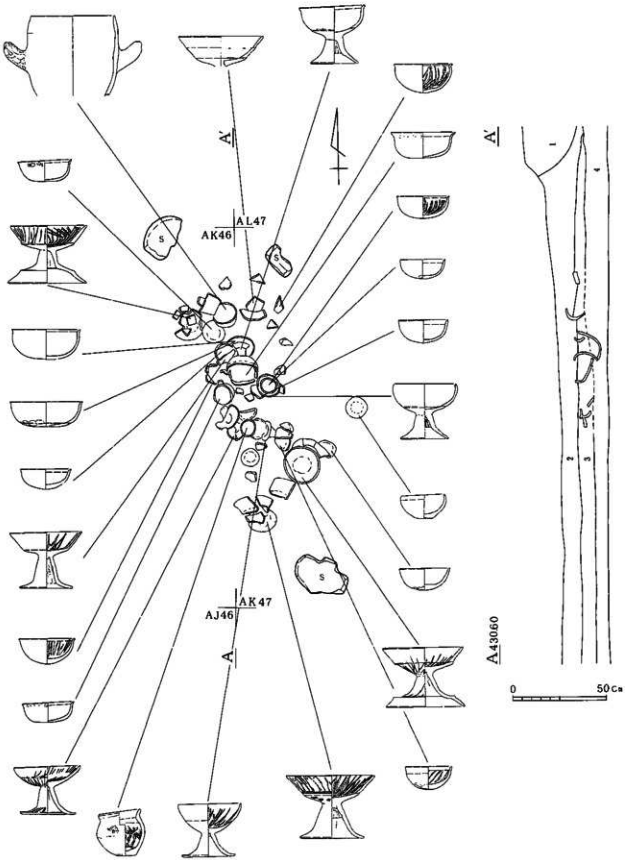
時期は、古墳時代中頃（５世紀後半）と考えられる。

④焼土集中１(挿図21・28　図版17・21)

ＡＫ47を中心に検出した。最初、長軸1.6m、短軸1.15mの範囲内にまとまった焼土を検出した。焼土は特に北側に集中しているが、全体的に１cm 程度の小ブロックとして点在している。焼土中には土師器片が混入している。焼土を掘り下げると住居址床面のような堅い面があり、焼土がのっている。この部分では焼土の範囲は南北に広がっており、南側にある石は熱を受けている。この堅い面の北側からは土師器（坏・内黒の坏・鉢・甕）が、南側からは部位は特定できないが小骨片が出土している（挿図21)。遺構の範囲は確認できず、堅い面を住居址床面とし、焼土はカマドの残骸と考えられるが、焼土の量は一つのカマドとしては多く、土器集中１・２との関連を考慮する必要がある。

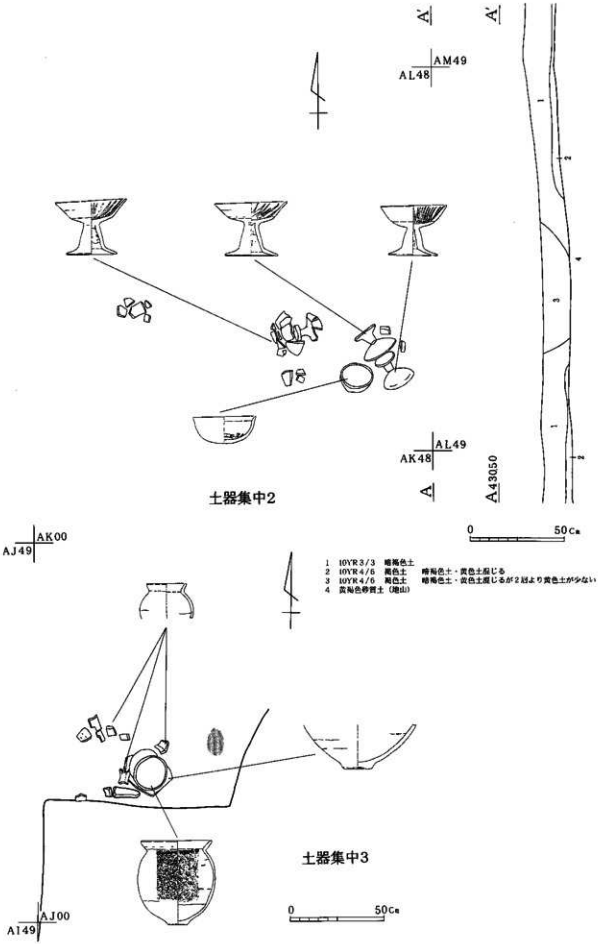
遺物の量は多くはないが、挿図28－８の鉢には暗文状のミガキが施されている。

時期は、古墳時代中頃（５世紀後半）と考えられる。

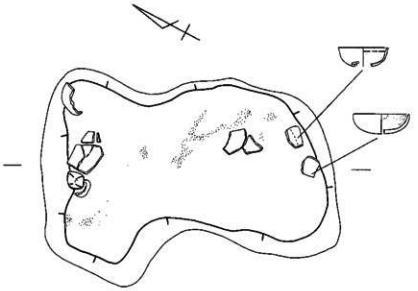


1　10YR3/3　暗褐色土　SCL　しまりあり　粘性なし　SD008盛土
2　10YR3/4　暗褐色土　SCL　しまりあり　粘性なし　10YR6/6明黄褐色土が混じる
3　10YR3/4　暗褐色土　SCL　しまりあり　粘性なし
4　黄褐色砂質土（地山）

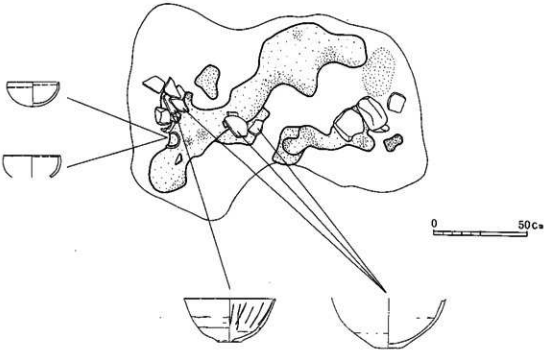
挿図19　土器集中１遺物出土状況



挿図20　土器集中２・３遺物出土状況



1	10YR4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR6/5明黄褐色土、炭化物、焼土が混じる
2	10YR3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR6/6明黄褐色土、炭化物、焼土が混じる
3	10YR3/1	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
4	10YR5/3	純い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR6/6明黄褐色土、炭化物が混じる　焼土が多く混じる
5	10YR3/3	暗褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR6/6明黄褐色土、焼土が混じる
6	10YR6/4	純い黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	
7	10YR3/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	1cm 前後の焼土ブロックが多く混じる
8	10YR2/2	黒褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	焼土粒が混じる
9	10YR4/2	灰黄褐色土	SCL	しまりあり	粘性なし	10YR7/6明黄褐色土が混じる　焼土粒が混じる



挿図21　焼土集中１・同遺物出土状況

第4節　遺　物

今次調査で出土した遺物について、以下の項目ごとに図版を載せる。遺物の個別内容については遺物観察表による。

なお、H元調査の遺物のうち、H13調査と重複する遺構出土のものについてはあわせて載せてある。

観察表については次のとおりである。

基本的に遺構番号にそって、挿図番号順になっている。法量は、残存率が高く、計測可能な部分についてはその数値を示し、図面上の復元実測による数値については（　　）書きになっている。残存は、全体的な残存率ではなく、図化した部分についての残存率を示している。

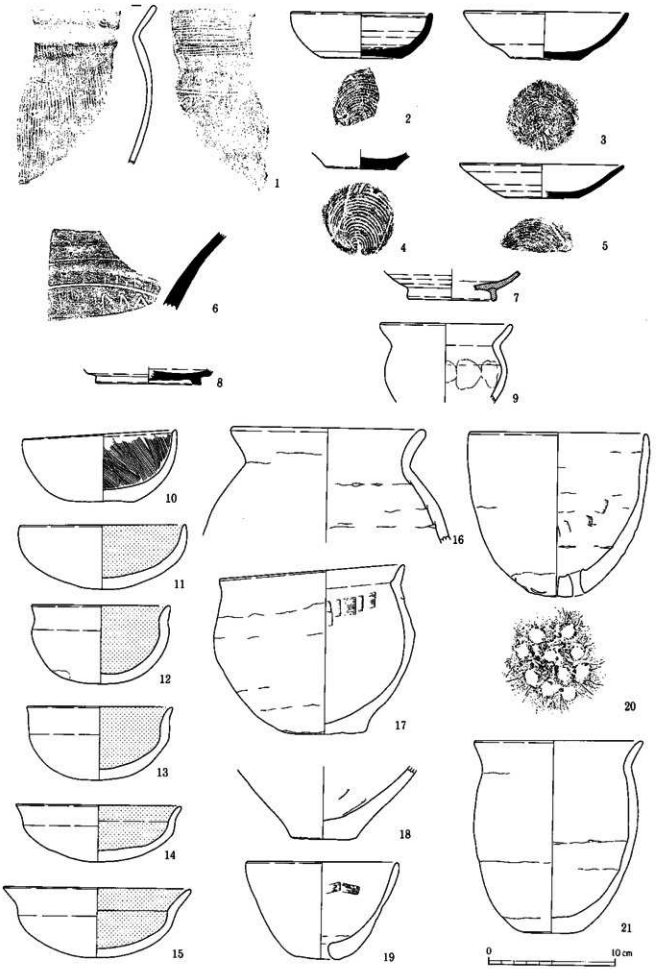
（1）遺構及び土器・焼土集中出土遺物（表1　　挿図22～28）

前節の各遺構記述の中で、遺物の出土状況及び特徴的な遺物のいくつかについて述べた。遺構の重複が著しく、異なる遺構間での遺物混同の可能性も否定できないが、新しい時期の撹乱による破壊を比較的免れており、出土状況は良好といえる。特に、古墳時代・平安時代についてはまとまった資料が得られた。

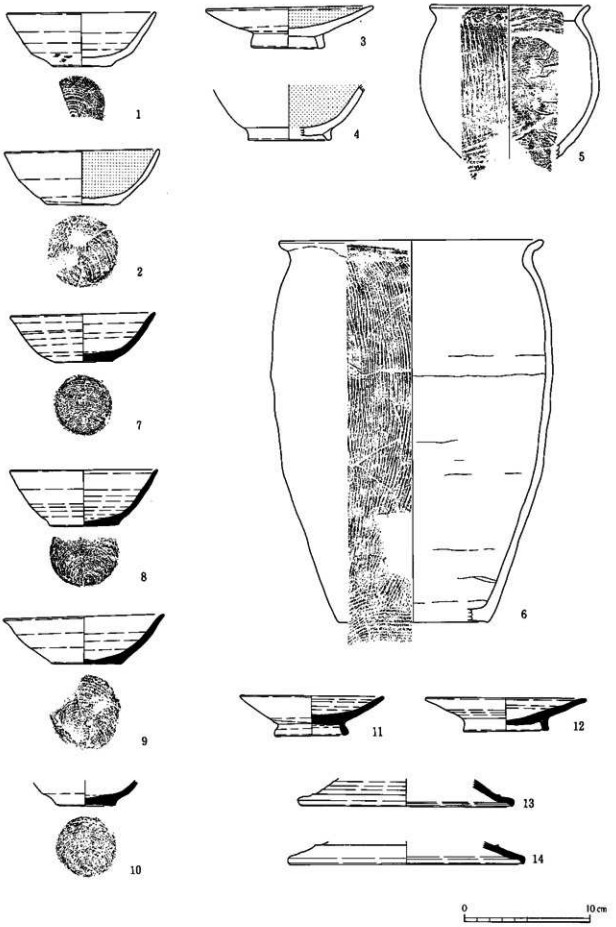
表1　遺構・土器集中・焼土集中出土遺物観察表

遺構	地点	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存
SB263	カマド	22－1	土師器	甕	－	－	－	タテハケ／口縁ヨコハケ・ナデ		良	褐	褐	破片
		22－2	須恵器	坏	(11.2)	－	(6.4)	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整		良	背灰	背灰	1/4
	カマド	22－3	須恵器	坏	13.1	－	5.4	3.8	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整（緑か）		φ5mm小石少々	軟	明褐	明褐	完存
		22－4	須恵器	坏	－	－	5.8	－	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整		軟	黒褐	明褐	完存
	カマド	22－5	須恵器	坏	(13.0)	－	(5.8)	2.6	ロクロ調整・糸切底／ロクロ調整		φ1mm小石含む	軟	灰褐	灰褐	1/2弱
		22－6	須恵器	甕	－	－	－	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	背灰	背灰	破片
		22－7	炭焼陶器	鉢	－	－	(7.0)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	明灰	明灰	1/4
SB266		22－8	須恵器	坏	－	－	(8.4)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		やや軟	明灰	明灰	1/8
SB304		22－9	土師器	甕	(10.6)	－	－	－	ナデ後ハケ(スス付着)／ナデ・ユビオサエ		良	黒褐	褐	1/4
SB305		22－10	土師器	坏	12.2	－	4.5	5.2	ナデ／タテハケ		良	黄橙	黄橙	ほぼ残
		22－11	土師器	坏	13.1	－	－	5.1	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	黄褐	内黒	完存
		22－12	土師器	坏	11.0	－	－	6.2	ナデ後ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	黄橙	内黒	ほぼ残
		22－13	土師器	坏	11.6	－	－	5.8	ナデ後ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	褐	内黒	ほぼ残
		22－14	土師器	坏	13.2	－	－	4.5	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	明赤褐	内黒	2/3
		22－15	土師器	坏	15.0	－	－	5.5	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	赤褐	内黒	ほぼ残
		22－16	土師器	甕	(16.5)	－	－	－	ナデ／ナデ		良	赤褐	赤褐	1/4
	カマド	22－17	土師器	甕	14.8	16.0	6.6	12.8	ナデ(スス付着)／ナデ後一部ハケ		良	黒褐	黄橙	ほぼ残
		22－18	土師器	甕(壺)	－	－	5.0	－	ナデ／ハケ		良	黄褐	灰褐	4/5
		22－19	土師器	甕	12.0	－	1.7	7.7	ナデ後一部ヘラミガキ(1孔)／ヨコハケ・ナデ		良	褐	褐	完存
		22－20	土師器	甕	14.0	－	－	12.9	ナデ一部(10孔)／ハケ後ナデ	1～3mm小石多	良	黄褐	明褐	ほぼ残
		22－21	土師器	甕	13.4	13.0	4.0	15.2	ヘラミガキ(煤こぼれ痕)／ナデ後ヘラミガキ		良	褐	黒褐	ほぼ残
SB306	カマド	23－1	土師器	坏	(11.8)	－	(4.8)	4.2	ロクロ調整・糸切底／ロクロ調整	1～2mm小石少々	良	明褐	明褐	1/4
	AL44	23－2	黒色土器	坏	12.4	－	5.6	4.4	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整・ミガキ		良	褐	内黒	3/4
	カマド	23－3	黒色土器	皿	13.4	－	6.0	3.2	ロクロ調整／ロクロ調整・ミガキ		良	褐	内黒	3/4
	カマド	23－4	黒色土器	鉢	－	－	(6.6)	－	ロクロ調整／ロクロ調整・ミガキ	1～2mm小石含む	良	褐	内黒	1/4
	カマド	23－5	土師器	甕	(12.8)	(14.2)	－	－	タテハケ／ヨコハケ		良	黒褐	黒褐	1/4
	カマド	23－6	土師器	甕	(21.0)	(22.4)	(12.0)	30.2	タテハケ(スス付着)／ナデ・口縁ハケ		良	褐	褐	1/4
	カマド	23－7	須恵器	坏	11.6	－	4.6	3.7	ロクロ調整・(静止)糸切底／ロクロ調整		良	背灰	背灰	ほぼ残
	AL44	23－8	須恵器	坏	(11.8)	－	5.6	4.4	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整	1mm小石多	良	背灰	背灰	1/4
	カマド	23－9	須恵器	坏	12.8	－	5.6	3.7	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整	2mm小石少々	良	灰	灰	3/4
	カマド	23－10	須恵器	坏	－	－	4.8	－	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整		良	灰	灰	ほぼ残
	カマド	23－11	須恵器	皿	11.5	－	6.0	3.1	ロクロ調整／ロクロ調整		軟	灰	褐灰	3/4
	カマド	23－12	須恵器	皿	(12.8)	－	(6.8)	2.6	ロクロ調整／ロクロ調整		良	背灰	背灰	1/2弱
		23－13	須恵器	高坏(脚)	－	－	(16.8)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	背灰	背灰	1/8
		23－14	須恵器	高坏(脚)	－	－	(18.6)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	背灰	背灰	1/8
SB307	カマド	24－1	土師器	坏	12.5	－	5.6	3.9	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整		良	褐	赤褐	3/4
	カマド	24－2	土師器	坏	(15.0)	－	6.2	5.3	ロクロ調整・回転糸切底／ロクロ調整	2～5mm小石含む	良	褐	黒褐	1/2強
	カマド	24－3	土師器	坏	14.9	－	6.3	5.0	ロクロ調整・回転糸切底(墨書か)／ロクロ調整	2～3mm小石多	良	赤褐	褐灰	3/5

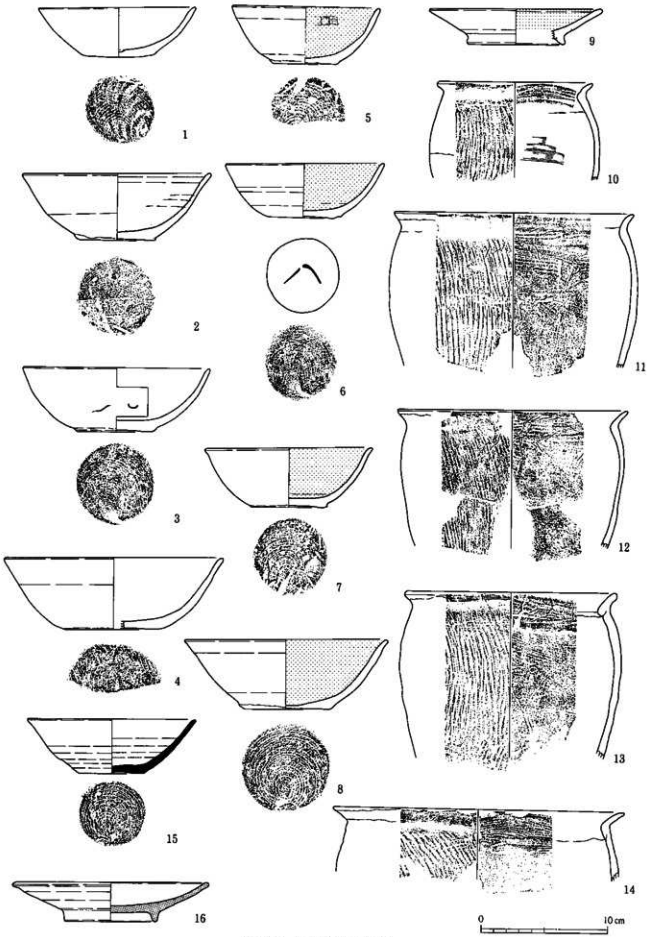
遺構	地点	調査No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	調整 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存
SB307		24—4	土師器	坏	(17.4)	－	(8.0)	5.6	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整		良	褐	褐	1/4
	AM44	24—5	黒色土器	坏	(11.8)	－	(5.6)	4.4	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整・一部ハケ		良	赤褐	内黒	1/4強
	カマド	24—6	黒色土器	坏	12.7	－	5.7	4.2	ロクロ調整・回転糸切痕(脚付)／ロクロ調整・ヘラミガキ	3mm小石多	良	褐	内黒	ほぼ完
	カマド	24—7	黒色土器	坏	13.3	－	6.0	4.6	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整		良	褐	内黒	ほぼ完
	カマド	24—8	黒色土器	坏	16.2	－	6.8	5.5	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整・ヘラミガキ		良	赤褐	内黒	3/5
	カマド	24—9	黒色土器	皿	(13.8)	－	(7.8)	(2.8)	ロクロ調整／ロクロ調整・ヘラミガキ		良	褐	内黒	1/7
	カマド	24—10	土師器	甕	12.3	13.0	－	－	タタキ／ケズリ		良	褐	褐	2/3
	カマド	24—11	土師器	甕	(19.0)	(19.8)	－	－	タタキ／ヨコハケ後ナデ	微密	良	黄褐	黄褐	1/6
		24—12	土師器	甕	(18.2)	(17.6)	－	－	タタキ／ヨコハケ後ナデ	5mm小石少々	良	黄褐	黄褐	1/8
	カマド	24—13	土師器	甕	(16.9)	(17.6)	－	－	タタキハケ／ヨコハケ後ナデ	微密	良	黄褐	灰褐	1/4
	カマド	24—14	土師器	甕	(23.1)	－	－	－	ナナメハケ／ヨコハケ後ナデ		良	黒灰	褐	1/6
	カマド	24—15	須恵器	坏	13.4	－	5.0	4.2	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整	3～8mm小石少々	やや軟	褐灰	褐灰	完存
	カマド	24—16	灰釉陶器	皿	17.6	－	7.2	3.1	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰	灰	2/3
SB308		25—1	土師器	坏	－	－	6.0	－	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整		良	褐	褐	2/3
		25—2	黒色土器	坏	(12.4)	－	5.8	3.9	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整		良	褐	内黒	1/2
		25—3	土師器	転用焼	－	－	6.6	－	ナデ(焼成後2孔穿孔)／ミガキ(炭化物付着)	1～2mm小石多	良	褐	黒	完存
		25—4	土師器	甕	－	－	7.2	－	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整	1～2mm小石多	良	赤褐	褐	3/4
		25—5	灰釉陶器	皿	－	－	(8.4)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	明緑灰	明緑灰	1/3
		25—6	灰釉陶器	皿	(14.4)	－	6.6	3.1	ロクロ調整／ロクロ調整(重ね焼き痕)	1mm小石含む	良	明灰	明灰	1/3
SB309		25—7	土師器	手づくね	7.5	8.7	6.2	6.8	ナデ・ハケ／ヘラザッエ		良	黒褐	赤褐	3/4
SB311	カマド	25—8	土師器	甕	(16.8)	(17.0)	－	－	タタハケ／ナデ(付帯物)		良	赤褐	褐	1/4
ST62		25—9	陶器	緑釉陶器	－	－	－	－			良	褐	灰	破片
H元調査(参考資料)		25—10	陶器	緑釉陶器	－	－	－	－			良	褐	灰	破片
廃光寺バイパス(参考資料)		25—11	陶器	緑釉陶器	－	－	－	－			良	褐	灰	破片
		25—12	陶器	緑釉陶器	－	－	(27.0)	－			良	褐	灰	破片
A N39F		25—13	土師器	壺	16.0	18.7	7.0	24.0	タテハケ／ヨコハケ		良	赤褐	褐	ほぼ完
SK88		25—14	陶器	四耳壺	－	－	－	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰褐	灰	破片
SK89		25—15	青磁	碗	－	－	(5.4)	－	ロクロ調整(蓮弁文様)／ロクロ調整		良	青緑	青緑	破片
SK91		25—16	土師器	坏	10.6	－	4.7	3.3	ロクロ調整・(静止)糸切痕／ロクロ調整		良	褐	褐	ほぼ完
		25—17	灰釉陶器	碗	16.7	－	8.1	6.3	ロクロ調整／ロクロ調整		良	明緑灰	明緑灰	完存
SK93		25—18	弥生土器	壺	－	－	(8.0)	－	ヘラミガキ後ハケ(底部未調整)／ヘラミガキ		良	褐	赤褐	1/3強
		25—19	土師器	鉢	－	(15.6)	－	－	ハケ後ヘラミガキ／ヨコ・ナナメハケ		良	赤褐	赤褐	1/2
SD34		25—20	須恵器	坏	－	－	(11.0)	－	ロクロ調整／ロクロ調整		良	青灰	青灰	1/7
土器集中1		26—1	土師器	坏	11.3	－	－	5.5	ケズリ・ナデ・ヘラミガキ／ヘラミガキ(暗文状)		良	黄褐	黄褐	ほぼ完
		26—2	土師器	坏	12.7	－	－	5.3	ヘラミガキ・ハケ／ヘラミガキ(暗文状)		良	褐灰	褐灰	完存
		26—3	土師器	坏	13.8	－	－	6.0	ヘラミガキ／ヘラミガキ(暗文状)		良	黒褐	暗褐	4/5
		26—4	土師器	坏	14.3	－	－	7.0	ナデ／ナデ後ヘラミガキ(暗文状)		良	黄褐	黄褐	完存
		26—5	土師器	坏	10.8	－	－	4.7	ケズリ・ヘラミガキ／ヘラミガキ(暗文状か)		良	黄褐	黄褐	完存
		26—6	土師器	坏	12.2	－	－	5.2	ナデ・ケズリ後ナデ／ナデ	2mm小石含む	良	褐	赤褐	2/3
		26—7	土師器	坏	12.0	－	－	5.5	ヨコヘラミガキ・ケズリ／ナデ後ヘラミガキ		良	褐	褐	2/3
		26—8	土師器	坏	12.3	－	－	5.1	ケズリ後ハケ・ヘラミガキ／ハケ後ヘラミガキ		良	褐	褐灰	完存
		26—9	土師器	坏	13.0	－	－	5.0	ナデ／器面荒れ(ヘラミガキか)	砂質	良	黄褐	黄褐	完存
		26—10	土師器	坏	12.6	－	－	4.8	ナデ／ナデ後ヘラミガキ	2～3mm小石含む	良	黄褐	黄褐	完存
		26—11	土師器	坏	15.6	－	－	6.1	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	黄褐	黄褐	完存
		26—12	土師器	坏	16.6	－	－	7.3	ナデ後ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	褐黄褐	黄褐	3/4
		26—13	土師器	坏	17.5	－	－	6.0	ヘラケズリ／ナデ後ヘラミガキ		良	橙	橙	1/4
		26—14	土師器	高坏(坏)	(20.5)	－	－	－	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ		良	黄褐	黄褐	1/2
		26—15	土師器	高坏	17.5	－	12.9	13.6	ナデ・一部ハケ／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	黄褐	橙	ほぼ完
		26—16	土師器	高坏	21.5	－	15.5	15.0	ナデ後ハケ・ハケ目・調整文状)／ナデ後ヘラミガキ(暗文状)		良	黄褐	橙	ほぼ完
		26—17	土師器	高坏	18.5	－	19.1	13.9	ナデ後ヘラミガキ(調整痕文状)／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	橙	橙	2/3
		26—18	土師器	高坏	19.4	－	19.0	14.4	ナデ後ヘラミガキ(坏・調整文状)／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	明褐	内黒	2/4
		27—1	土師器	高坏	15.0	－	12.9	12.5	ナデ後ヘラミガキ(調整文状)／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	黄褐	黄褐	完存
		27—2	土師器	高坏	14.8	－	11.6	13.2	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ(坏暗文状か)	1mm小石多	良	赤褐	橙褐	ほぼ完
		27—3	土師器	高坏	15.9	－	11.6	13.7	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ(坏暗文状か)	3～8mm小石多	良	褐	褐	ほぼ完
		27—4	土師器	高坏	16.1	－	13.5	11.4	ナデ後ヘラミガキ(坏・調整文状)／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	橙	黄褐	ほぼ完
		27—5	土師器	甕	10.3	－	4.8	11.1	ナデ後一部ハケ／ハケ		良	褐	褐灰	完存
		27—6	土師器	甕	20.2	22.0	－	－	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ		良	黄褐	黄褐	1/5
土器集中2		27—7	土師器	坏	15.3	－	－	6.4	ナデ・ケズリ／ハケ		良	黄褐	黄褐	完存
		27—8	土師器	高坏	16.0	－	11.9	11.8	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	黄褐	黄褐	完存
		27—9	土師器	高坏	17.7	－	12.9	12.6	ナデ・ハケ／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	黄褐	黄褐	完存
		27—10	土師器	高坏	17.3	－	12.3	12.8	ナデ後ヘラミガキ／ナデ後ヘラミガキ(坏部暗文状)		良	黄褐	黄褐	完存
土器集中3		28—1	土師器	甕	17.2	18.6	4.4	20.3	ナデ後ハケ(上半スス付着)／ナデ後ハケ		良	黒い褐	黒い褐	ほぼ完
		28—2	土師器	鉢(甕)	(9.6)	(13.0)	－	－	ナデ／ナデ		良	褐	褐	1/4
		28—3	土師器	壺	－	－	6.5	－	ナデ後ハケ／ハケ後ヘラナデ	1mm小石多	良	橙	赤褐	1/2
竪土集中1		28—4	土師器	坏	(12.4)	－	－	6.0	ナデ／ナデ後ヘラミガキ(暗文状か)		良	赤褐	赤褐	1/3
		28—5	土師器	坏	(13.6)	－	－	－	ナデ／ナデ		良	赤褐	赤褐	1/4
		28—6	土師器	坏	(12.0)	－	－	－	ヘラミガキ・一部ケズリ／ヘラミガキ		良	褐	内黒	1/3
		28—7	土師器	坏	(13.4)	－	－	4.7	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	黒褐	内黒	2/5
		28—8	土師器	鉢	(22.1)	－	(5.6)	10.6	ナデ／ハケ後ヘラナデ(暗文状)		良	赤褐	明褐	1/2強
		28—9	土師器	壺	－	－	(8.0)	－	ナデ／ナデ後ハケ	1mm小石含む	良	黒褐	黒い褐	1/3



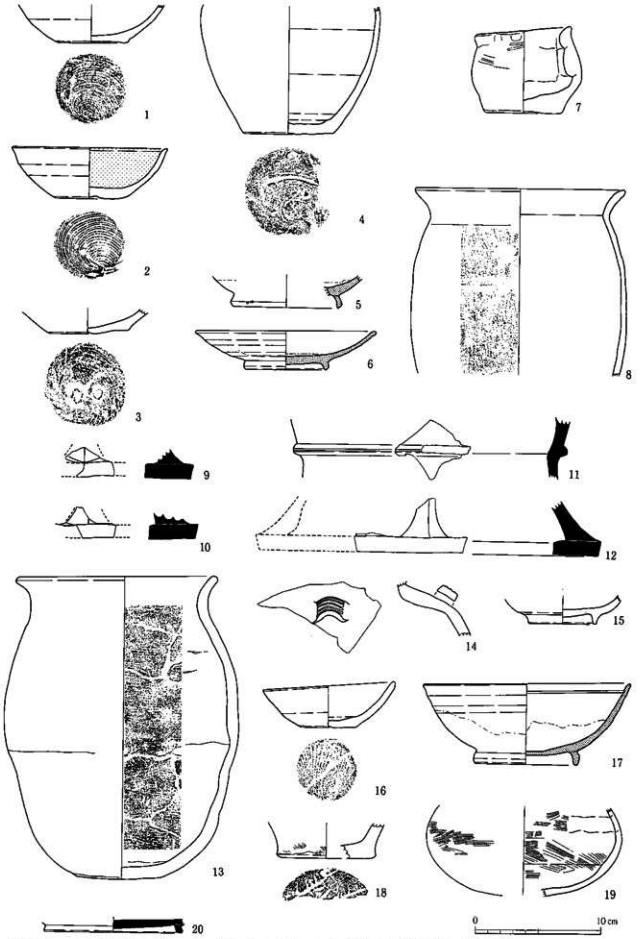
挿図22　ＳＢ263（1～7）・266（8）・304（9）・305（10～21）出土遺物



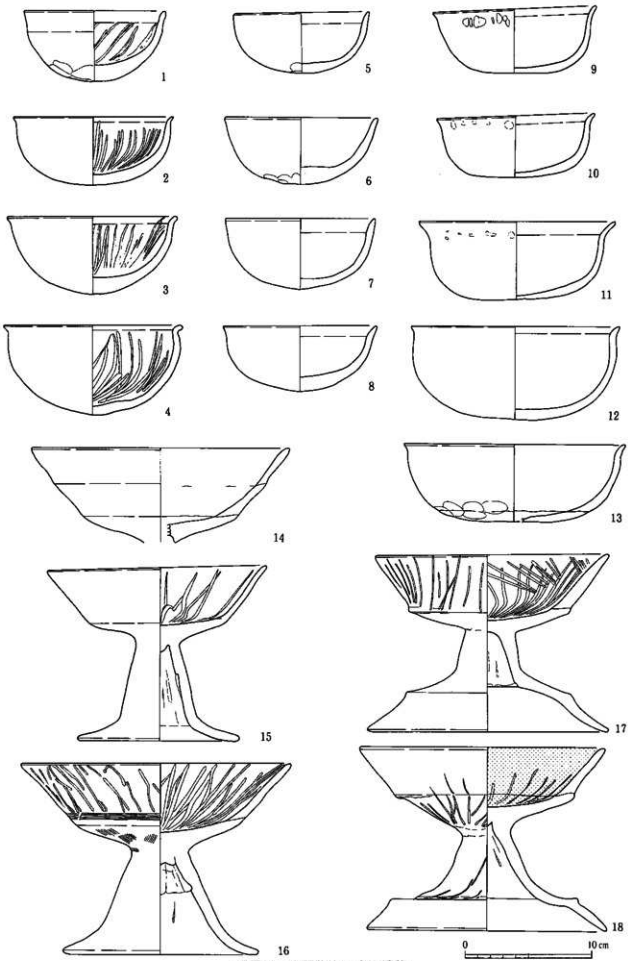
挿図23　ＳＢ306出土遺物



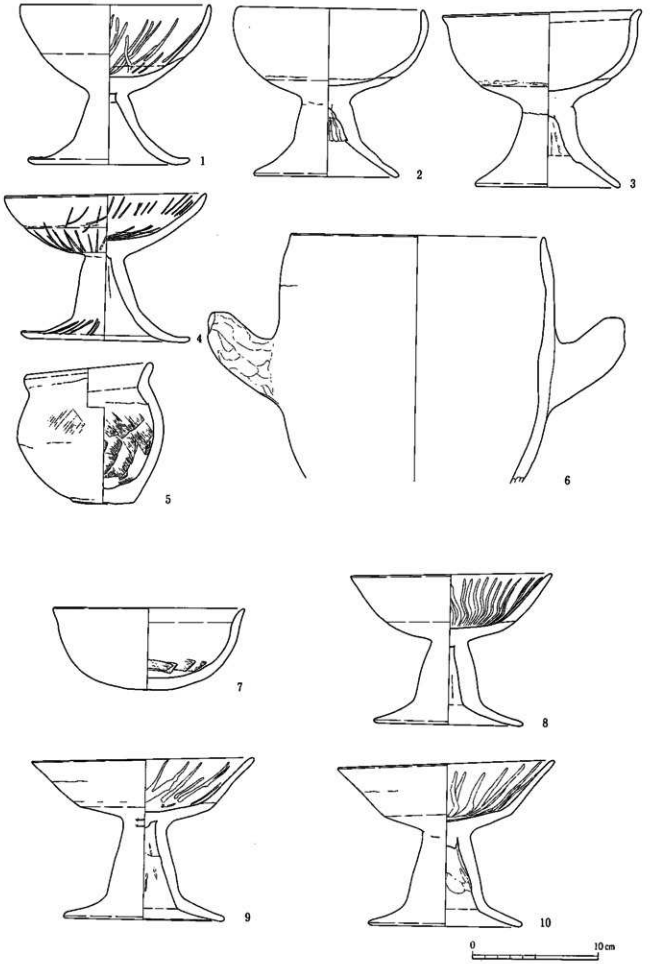
挿図24　ＳＢ307出土遺物



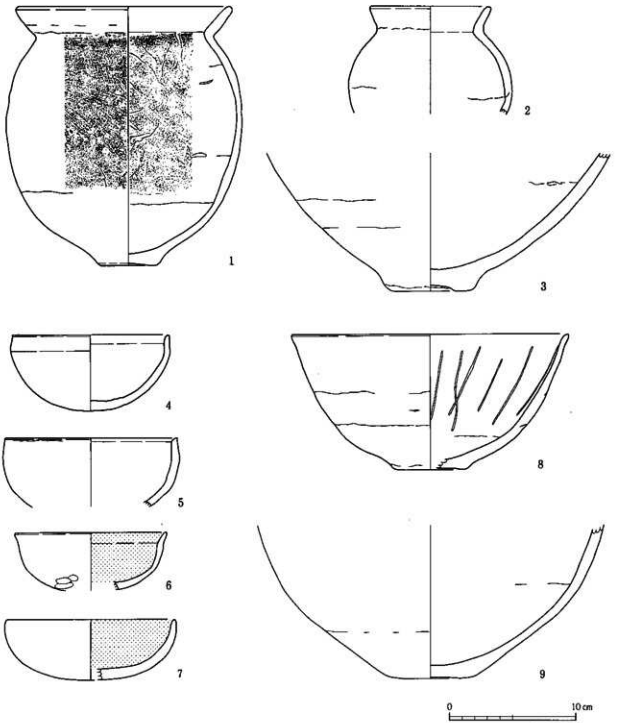
挿図25　ＳＢ308（1～6）・309（7）・311（8）・ＳＴ62（9）・参考資料（10～12）・
ＡＮ39Ｐ１（13）・ＳＫ88（14）・89（15）・91（16・17）・93（18・19）・ＳＤ34（20）出土遺物



挿図26　土器集中１出土遺物



挿図27　土器集中１（１～６）・土器集中２（７～10）出土遺物



挿図28　土器集中３（１～３）・焼土集中１（４～９）出土遺物

（2）遺構外出土遺物（表２　挿図29）

遺物包含層からの遺物の出土は多く、縄文時代から中世・近世に及んでいる。今次調査地点西側のＨ元調査の際には、縄文時代中期の埋甕や弥生時代後期・古墳時代後期・奈良・平安時代・中世と多時期にわたっている。今次調査地点では、弥生時代が少量あるほか、古墳・平安時代の遺物が多い。

表２　遺構外出土遺物観察表

遺構	地点	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	調整 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	残存
遺構外	AK46	29−1	弥生土器	甕	(19.0)	−	−	−	ナデ／ナデ		良	明褐	明褐	1/8
	AK47	29−2	土師器	坏	10.3	−	4.2	5.7	ナデ／ナデ		良	黄橙	褐	ほぼ残
		29−3	土師器	坏	10.5	−	5.7	6.6	ナデ／ナデ		良	褐	褐	3/4
	AN48	29−4	土師器	坏	(15.0)	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	褐	内黒	1/3
	AJ48	29−5	土師器	坏	15.0	−	−	5.5	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	褐	内黒	ほぼ残
	AJ48	29−6	土師器	高坏（脚）	(16.0)	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラミガキ		良	褐	褐	1/4
	AJ49	29−7	土師器	高坏（脚）	−	−	12.0	−	ヘラミガキ・坏ナデ／坏ナデ・脚ケズリ		良	赤褐	褐	3/4
	AM46	29−8	土師器	高坏（脚）	−	−	−	−	ナデ／ハケ	1〜2mm小石含む	良	明褐	明褐	3/4
	AJ48	29−9	土師器	壺	(12.4)	(13.8)	−	−	ヘラミガキ／ヘラミガキ・ハケ		良	黒褐	内黒	1/4強
	AD40	29−10	土師器	甕	(14.8)	−	−	−	ナデ／ナデ	1〜2mm小石多	良	明褐	明褐	1/4
	AJ48	29−11	土師器	甕	−	−	6.3	−	ナデ／ケズリ後ヘラミガキ		良	黒褐	黒褐	ほぼ残
	AN45	29−12	土師器	壺	−	−	(5.8)	−	ナデ／ヘラミガキ		良	明褐	明褐	1/2
	AK48	29−13	土師器	坏	(10.4)	−	(5.1)	3.9	ロクロ調整・静止糸切痕／ロクロ調整	3〜5mm小石少々	良	黄橙	黄橙	1/2強
	AM46	29−14	土師器	坏	(13.0)	−	(6.6)	3.4	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整		良	暗灰	暗灰	1/4
		29−15	黒色土器	坏	(13.0)	−	5.4	4.4	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整後ヘラミガキ		やや軟	赤褐	内黒	1/3
	AK47	29−16	須恵器	甕杯(蓋)	(9.4)	−	−	−	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰黄	灰	1/2
		29−17	須恵器	甕杯(身)	11.8	−	4.3	5.1	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰	暗灰	4/5
	AL47	29−18	須恵器	甕杯(身)	(12.0)	−	−	−	ロクロ調整／ロクロ調整		良	明灰	明灰	1/4
	AL46	29−19	須恵器	坏	(14.8)	−	−	−	ロクロ調整／ロクロ調整	1〜2mm小石多	良	灰黄	灰黄	1/4
	AM47	29−20	須恵器	坏	−	−	5.9	−	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整	2〜3mm小石含む	良	灰	灰	ほぼ残
	AL47	29−21	須恵器	坏	−	−	−	−	ロクロ調整・回転糸切痕／ロクロ調整	砂粒多	良	灰	灰	1/2
	AL49	29−22	須恵器	坏	−	−	(8.8)	−	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰黄	灰黄	1/2
	AL00	29−23	須恵器	壺	(25.8)	−	−	−	ロクロ調整／ロクロ調整	2〜3mm小石含む	良	灰黄	暗灰	1/8
	AM47	29−24	灰釉陶器	皿	−	−	(7.4)	−	ロクロ調整／ロクロ調整		良	明灰	明灰	1/4
	AL47	29−25	灰釉陶器	皿	−	−	(8.4)	−	ロクロ調整／ロクロ調整		良	灰	灰	1/5

（3）石製品・土製品・石器（表３・４　挿図30・31）

石器の量は西側に比べて今次調査地点では少ない。石鏃・打製石斧・石庖丁類などがある。多くは、縄文時代から弥生時代にかけてのものとみられるが、包含層においても出土量が少ないのは、確認された遺構が石器を使用する時期のものではないことによるからであろう。磨製石鏃や石製模造品・玉類など小型品もわずかに出土しているが、遺構の重複が著しいことから、伴う遺構を特定しがたく、遺構外となっているものがある。

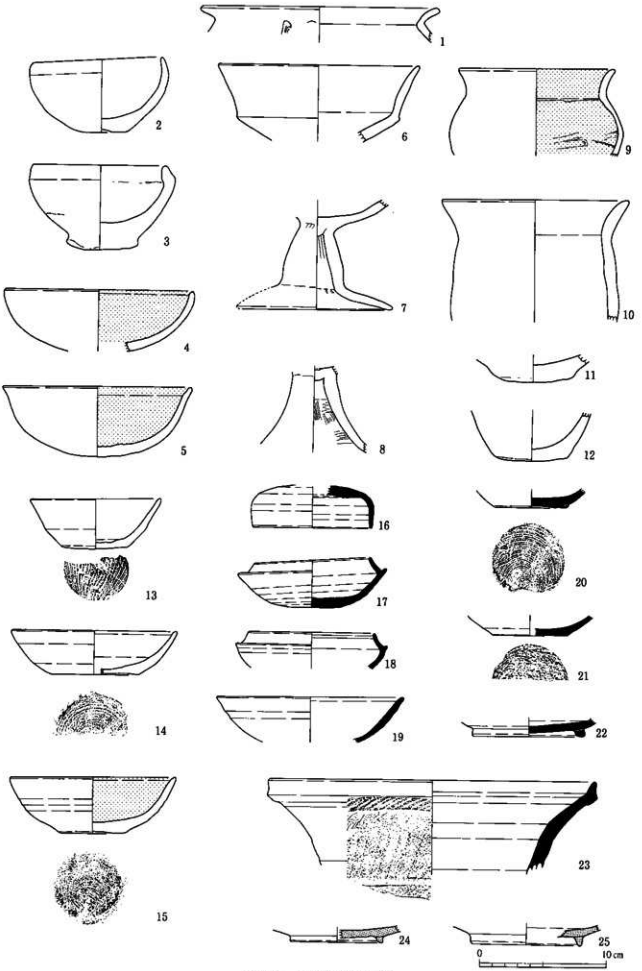
表３　石・土製品観察表

遺構No.	図版No.	用途	寸法(mm) 最低	最大長	孔径	穿孔方向	材質
SB268	30−1	臼玉	5.5	3	1	片側穿孔	粉石
	30−2	丸玉	11	11	3	両側穿孔	結晶質岩
−	30−3	丸玉	8	5.5	2	両側穿孔	結晶質岩
SB266	30−4	石製模造品（勾玉）	長さ27・最大幅5・厚さ4.5・孔径2			片側穿孔	粉石
AK00	30−5	石製模造品（勾玉）	長さ35・最大幅14・厚さ6・孔径1〜2			片側穿孔	粉石
SB308	30−6	土錘	長さ33・最大径15・厚さ5〜6				土製

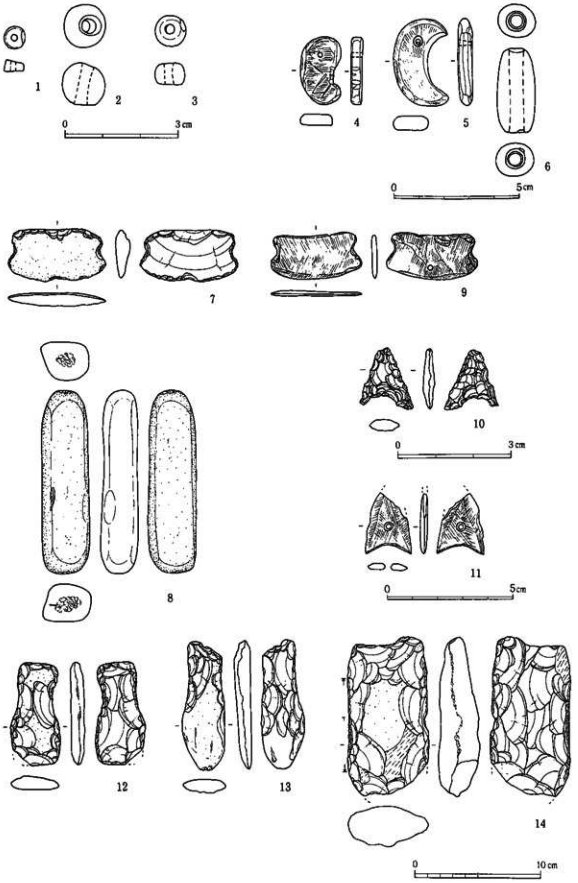
表４　石器観察表

遺構No.	図版No.	器種	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
SB308	30−7	抉入打製石庖丁	4.1	6.8〜7.8	1.1	硬砂岩
SB308	30−8	磨打斧	14.5	3.8	2.3	硬砂岩
SD33	30−9	磨製石庖丁	3.4	6.1〜7.2	0.5	粘板岩
−	30−10	石鏃	1.6	1.4	0.3	黒曜石
AL46	30−11	磨製石鏃	−	1.8	0.3	粘板岩
−	30−12	打製石斧	8.1	3.9	1.1	硬砂岩
AL48	30−13	打製石斧	10.2	3.4	1.3	緑色片岩
AK49	30−14	打製石斧	−	6.4	3.3	硬砂岩

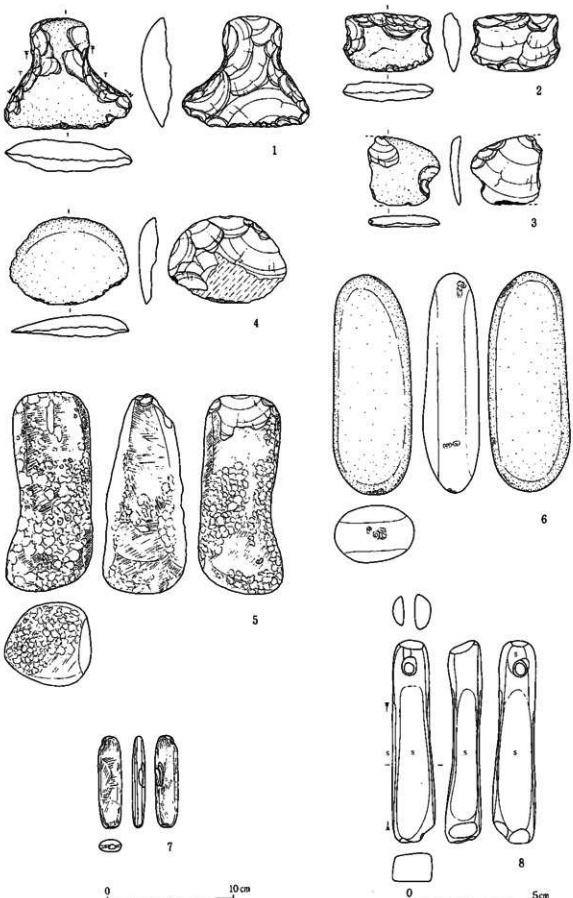
遺構No.	図版No.	器種	寸法(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
−	31−1	有肩扁状磨石斧	8.6	10.1	2.4	硬砂岩
AL00	31−2	抉入打製石庖丁	4.6	6.4〜7.1	1.4	硬砂岩
AM50	31−3	抉入打製石庖丁	5.4	−	0.9	硬砂岩
−	31−4	横刃型石器	6.9	9.4	1.7	硬砂岩
AK47	31−5	磨打斧	15.6	6.6	6.6	硬砂岩
AL46	31−6	磨打斧	17.2	6.2	4.5	硬砂岩
AK46	31−7	磨打斧	7.2	1.8	1	粉質片岩
AI49	31−8	砥石	8.0	1.7	1.4	ホルンフェルス



挿図29　遺構外出土遺物



挿図30　ＳＢ266(４)・268(１・２)・308(６～８)・ＳＤ33(９)・遺構外出土石製品・石器・土製品



挿図31　遺構外出土石製品・石器

第Ⅳ章　ま　と　め

今次調査地点のある恒川遺跡群　田中・倉垣外地籍では、これまでに座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査をはじめとして、民間開発や補助事業として十数箇所調査を実施してきており、恒川遺跡群の中でも遺構・遺物の両面から郡衙とのかかわりが指摘され、再検討が必要となってきており、報告書刊行に向けて順次整理作業を進めているところである。

恒川遺跡群のほぼ中心にあたるのは湧水池であった「恒川清水」と呼ばれるところであり、田中・倉垣外地籍は、ここよりも西側の一帯である。郡衙の正倉が確認された薬師垣外地籍からは、300m程離れている。

今次調査地点において、出土遺物から遺構の時期・性格が把握できるものは、古墳時代中期から後期（5世紀中頃から6世紀後半）、平安時代前期（9世紀後半）・平安時代後期（11世紀）、中世である。

5世紀中頃から後半のものとしては、ＳＢ305・土器集中１・２・３・焼土集中１がある。中期にあたる土器集中１・２・３・焼土集中１については、本文中で述べたとおり遺構としては把握できなかったが、関連性の高いものと考えられる。土器集中３は住居址の可能性があるが、他は坏・高坏が主体であり、土器集中１は特に遺物量が多く、坏13・高坏９・小型壺１・甑１がある。土師器以外、須恵器や石製品といった遺物を含まないが、重ねられていたものなどがあり、意図的な配置が考えられることから、祭祀的な性格も考慮に入れる必要があろう。土器集中２も遺物の量は少ないが、やはり同様の性格が想定され、焼土集中１は土器集中１・２と直接的なかかわりは明確にできなかったが、一連のものとして考えられる。

古墳時代後期（6世紀前半）のものはＳＢ305の１軒のみである。調査は一部であるが、一辺８m前後の規模が考えられる大型の住居址である。

このほか、古墳時代以降とみられるものとして、ＳＢ266・267・304がある。

平安時代前期（9世紀後半）では、ＳＢ263・306・307・308である。それぞれ重複しており、カマドを中心とする遺物と切り合いから前後関係を把握した。

ＳＢ263　軟質須恵器・灰釉陶器（碗）

ＳＢ306　須恵器の量が多い・黒色土器（碗・皿）・須恵器（皿）

ＳＢ307　黒色土器が多い・黒色土器（坏・皿）・灰釉陶器（皿）・ロクロ調整土師器

ＳＢ308　黒色土器・ロクロ調整土師器・灰釉陶器（碗・皿）

軟質須恵器・須恵器と黒色土器の割合、灰釉陶器・ロクロ調整土師器の有無といった遺物の傾向や遺構の切り合い関係により、古いほうからＳＢ306－307－263・308と考えられる。基本的には9世紀後半で時期的に近接しており、該期の集落の密集度や短期的な住居の建て替えが想定される。

平安時代後期（11世紀）のものとしてＳＫ91がある。

中世は、小竪穴22・ＳＫ88・89で、居住域とは異なる利用が考えられる。

周辺部との十分な比較検討ができていないが、今回の調査を概観すると次のとおりである。

〔縄文時代〕

縄文時代については、H元調査のうち、今次調査地点とは重複しない西側で、縄文時代中期の埋甕とみられる深鉢と黒曜石製石鏃が出土しているほか、当地籍内では早期から晩期にかけての遺物が出土しているが、今回の調査を含めて、該期の集落等については明確ではない。

〔弥生時代〕

弥生時代になると、地籍内では中期から後期にかけての遺構数が増大し、この時期本遺跡の立地する台地上に集落が広がっていたとみられる。後期になると、居住域と方形周溝墓にみられる墓域が確認できる。今次調査地点をみると、H13調査では破片のみの出土であったが、H元調査では後期の住居址が確認されており、該期の集落の存在が想定される。

後期の集落は、今次調査地点を中心とすると、調査地点の南から東にかけての一帯で、店舗建設に先立って実施した地点（ＫＵＲ4612）において方形周溝墓が確認されており、これに対し今次調査地点では方形周溝墓の検出はなく、今次調査地点を含めた西側から南西側にかけての一帯は居住域として捉えられる。この集落は、さらに西側に広がる低湿地を生産基盤とする集団であることが指摘されている。

〔古墳時代〕

古墳時代前期については、今次調査地点で遺構・遺物は確認されていない。周辺では多くはないが、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構が確認されている。恒川遺跡群全体でみた時、前期のある時期に集落の移動・拡大があったことが指摘されている。

中期は、当地方における古墳形成との関連で捉えられる。恒川遺跡群の北側の段丘上に立地する高岡・新井原古墳群の存在がこの地域の性格の一端を示している。この古墳群は中期において、帆立貝形古墳である新井原12号古墳を中心に円墳等で構成される古墳群であり、近年の発掘調査で馬を埋葬する土壙の存在が知られるようになったことで、中期における当地方の古墳形成が馬とのかかわりの中で展開していったことを裏付けるものとなっている。また、中期における多様な墓制のあり方は、古墳を含めた墓域形成の母体となった集団の居住域としての恒川遺跡群のあり方を考える上でも重要なポイントとなろう。また、中期において座光寺地区では前方後円墳が確認されておらず、集落の規模・展開とどう関係するか、この点も今後の検討課題である。

田中・倉垣外地籍においては、今次調査地点の西側で住居址が確認されている。今次調査地点においては住居址としては確認できなかったが、土器集中１・２・３と焼土集中１がこの時期のものと考えられる。本文中でも述べたように遺構としては確認できなかったが、通常の住居以外の性格も考えられ、今後周辺部の状況との比較検討が必要である。

後期には、古墳の埋葬施設として、６世紀初頭に横穴式石室が導入され、北本城古墳や当地方では比較的規模の大きい高岡１号古墳といった前方後円墳が築造されるとともに、小単位で構成される円墳群が出現するなど、中期の古墳形成に続く画期として捉えられる。特に石室形態については、座光寺地区の古墳の中で独自性がみられる点が注目される。集落については、前代同様、基本的な生産基盤や集団構成に大きな変化はないと考えられる。該期の集落の中心は今次調査地点より西側に広がっていた可能性がある。

今次調査地点では、ＳＢ305が６世紀前半の住居址である。この時期の住居址は確実なところこの１軒であるが、一辺８ｍ前後という比較的大型の住居址であり、集落内における位置付けを考える必要がある。

古墳後期末～飛鳥時代については、奈良時代における当地域の郡衙としての性格を考えると該期の集落のあり方は、次の新たな体制（律令体制）へと移行する中で、新たな展開をみせるものと考えられ、集落の大きな移動や再編成があることが想定される重要な時期といえる。近年、座光寺地区においてその存在が確認された「富本銭」も該期にかかわるものである。該期の住居址は今次調査地点では確認できないが、地籍内では今次地点の東から南側にかけての一帯に集落の存在が確認できる。一辺９ｍ前後の大型住居址もあり、この時期の集落構成が把握できる。

〔奈良時代〕

奈良時代については、当地籍には郡衙との関係において注目される大型の掘立柱建物址や今次調査地点で２点出土している蹄脚硯、二彩陶器などがあり、政庁が確認されていない状況での郡衙のあり方を考える上で重要である。しかし、今次調査地点においては、蹄脚硯が出土しているものの該期の遺構は確認されず、ＳＴ62も平安時代以降の可能性があり、郡衙との関連は明確ではない。硯は恒川遺跡群全体で出土しているが、いずれも破片であり、その帰属する遺構については明確ではなく、郡衙としての状況を把握する資料としては、捉え方が難しいといえる。しかし、蹄脚硯は７世紀末から９世紀にかけて生産され、ほかの硯に比べ特殊性が指摘されているだけに、その存在は注目される。

また、概期では在地における窯業生産も開始され、これまでに８世紀から９世紀にかけての須恵器の窯址が竜丘地区・伊賀良地区・龍江地区で確認されている。座光寺地区では８世紀の金井原瓦窯址が調査されている。恒川遺跡群内で出土した須恵器等も在地生産のものがあると考えられるが、十分な比較検討がなされておらず、今後の検討課題である。

〔平安時代〕

平安時代前期（９世紀）になると、今次調査地点でもＳＢ253・306・307・308などがあり、西側の一帯も含めて集落の展開が確認できる。南側の座光寺バイパスの調査でも今回の住居址と同時期の住居址が確認されており、この一帯に集落の展開する様子が確認できる。

該期の住居址規模は小型であることが指摘されているが、今次調査地点においても同様の状況が確認できる。また、近接する住居址に時期差がほとんどないことから、こうした住居が短期間で建て替え、あるいは移動をしていたことが考えられる。上郷地区の堂垣外遺跡では、集落構成として大型住居を中心として、数軒の小型住居との組み合わせがみられる。この遺跡からは三彩陶器・円面硯・帯金具が出土していることから、その性格等について対比させて考えることができる。

奈良時代から平安時代前期における集落のあり方は、郡衙自体の盛衰・変化と連動していることが考えられる。８世紀後半から９世紀の集落の増大、そしてこれまで継続してきた集落が９世紀後半以降には縮小・廃絶するという傾向は、律令時代の変質・解体とかかわるものであり、郡衙の成立と機能の消滅とかかわるという指摘とも符合してくる。

恒川遺跡群全体でみたときは、集落は巨視的には長期的に展開するが、詳細にみるとその展開には、

変遷・移動があると考えられ、全体としての集落展開を追う必要があり、特に都衙存続時期前後においては、政治的意図をもった集落の移動や新たな集落の展開が想定されるだけに重要なポイントとなるであろう。

11世紀の土坑の存在は、集落としての継続性・規模が短期・小規模であることを示している。

〔中世〕

中世では、土坑や小竪穴がある。土坑は墓といった性格も考えられるが、遺構・遺物からはその性格を特定できない。資料的にも少なく、該期の状況はほとんどわからない。

参考文献

下伊那地質誌編集委員会編　1976　「下伊那の地質解説」

飯田市教育委員会　1990　「恒川遺跡群　平成元年度範囲確認調査概要」

飯田市教育委員会　1986　「恒川遺跡群」

飯田市教育委員会　1988　「恒川遺跡　田中・倉垣外地籍」

飯田市教育委員会　1991　「恒川遺跡　田中・倉垣外地籍」

飯田市教育委員会　1994　「堂垣外遺跡　橋爪遺跡　藪上遺跡　長橋遺跡」

小平和夫　2003　「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻　第２号

吉田恵二　1985　「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第１輯

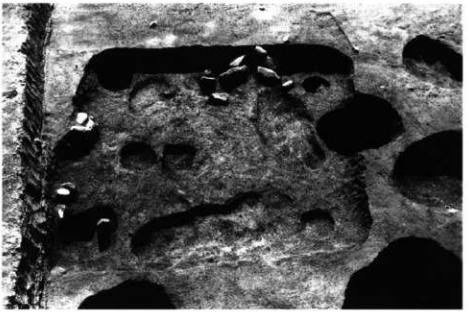
その他、飯田市教育委員会刊行の報告書

写 真 図 版

調 査 区 全 景（東から）

調 査 区 全 景（西から）

図 版 2



S B 263

S B 263カマド

S B 266・267

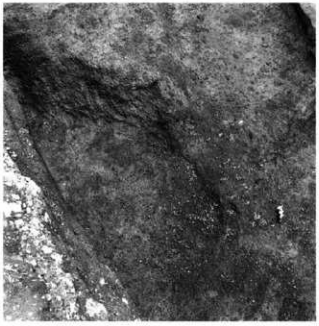
ＳＢ266カマド

ＳＢ267カマド

ＳＢ268・269

ＳＢ269カマド

図 版 4



左上　ＳＢ305　右上　ＳＢ305カマド
右中　ＳＢ305遺物出土状況

左下　ＳＢ305遺物出土状況
右下　同上

右　ＳＢ306・307

以下
ＳＢ306カマド・
同遺物出土状況

図 版 6

ＳＢ307カマド

同上

ＳＢ308

ＳＢ308カマド

ＳＢ308カマド断面

図 版 8

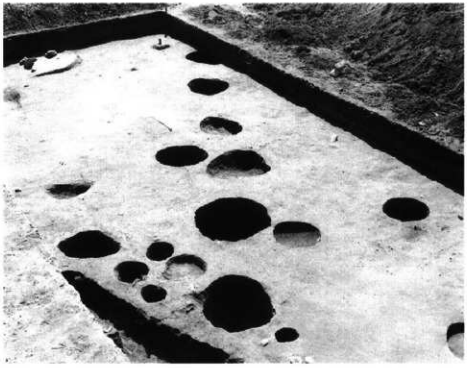
S B 309

S B 309カマド

S B 309カマド断面

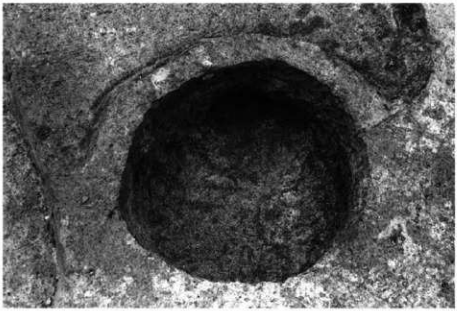
ＳＢ309カマド・ＳＢ310

ＳＢ309・311カマド断面



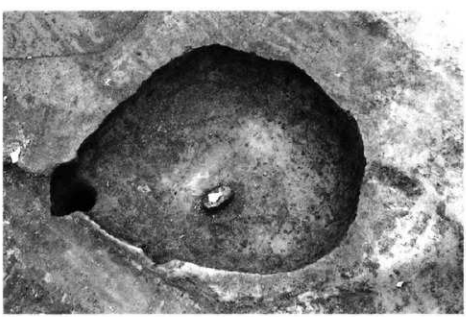
ＳＴ62

図 版 10

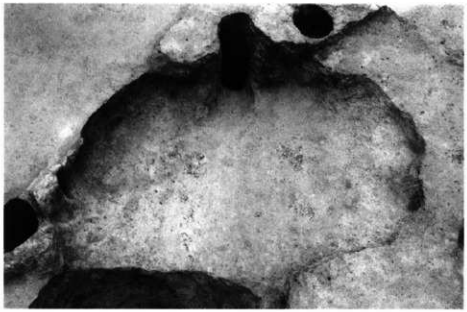


SK87

AN38PI
遺物出土状況

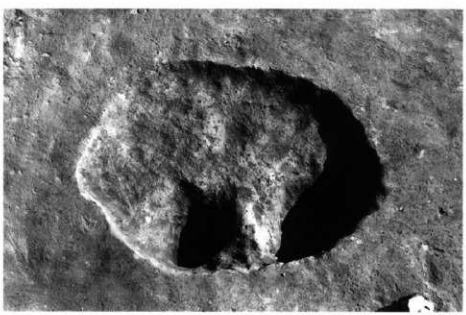


SK88



S K 89

S K 90

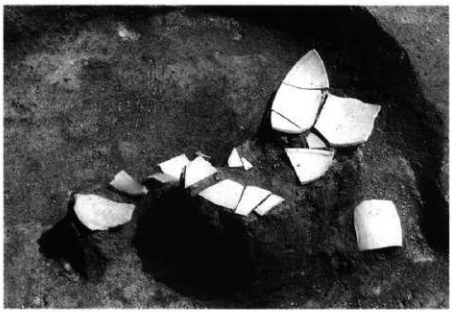


S K 92

図 版 12

ＳＫ91周辺

ＳＫ91



ＳＫ91遺物出土状況

S I 41

S I 42断面

S I 42

S I 42下部の土坑

図 版 14

小竪穴22

S D33

S D34

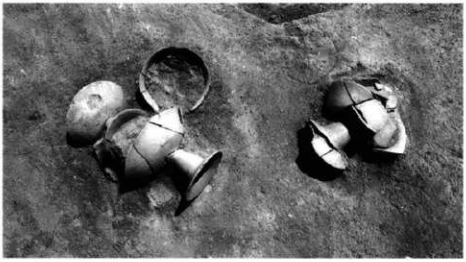
土器集中1

同上

同上

図 版 16

土器集中2周辺



土器集中2

土器集中3

焼土集中1周辺

焼土集中1

同上

図 版 18

調査前

重機作業風景

測量作業風景

調査風景

座光寺小見学風景

調査後

S B 263

S B 307

S B 305

S B 307

S B 306

S B 308

SB309

土器集中2

AN38 P1

土器集中3

SK91

焼土集中1

土器集中 1

遺構外

遺構外

遺構外

S B 308・S D 33

S B 266・268・308・遺構外

遺構外

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ごんがいせきぐん（たなか・くらがいとちせき）
書　　名	恒川遺跡群（田中・倉垣外地籍）
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小林正春　佐々木嘉和　滋谷恵美子
編 集 機 関	飯田市教育委員会
所　在　地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　　TEL0265-53-4545
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所　在　地	市町村	遺跡番号					
恒川遺跡群（ごんがいせきぐん）	飯田市座光寺（いいだしざこうじ） 4604-1ほか	20205		35° 31′ 48″	137° 52′ 19″	平成13年 6月4日～ 7月9日	119㎡	集合住宅 兼事務所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恒川遺跡群	集落	古墳時代 平安時代	竪穴住居址 掘立柱建物址 土坑・集石・溝址	古墳時代土師器・須恵器 平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器 石器・石製品	古墳・平安の集落 蹄脚硯

恒川遺跡群
（田中・倉垣外地籍）

平成15年3月発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会

印　　刷　龍共印刷株式会社